
退魔士と三色体の妖怪

桜井広樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

退魔士と三色体の妖怪

【Nコード】

N3509E

【作者名】

桜井広樹

【あらすじ】

赤・青・金の色をもった異名の妖怪三人と退魔士のお話夜中にいつも通りパトロールをし一匹妖怪を見つけ怪我をしたところ一人の男に助けられたが実はバンパイア！妖怪達と人間の悲しき世界！一応これでコメディー！！「覚悟しとけ！くず妖怪！！くず人間！！俺がテメーらをぶつ殺す！！」（千）

プロローグ

三日月が綺麗みかづきに出ている夜中。

ある、工場へと向かっている4人組がいた。

「ここに、いるんだよな？」

「あら、信じないの？」

「別に信じないわけじゃあ……。」

「なら文句言わない！」

「全く、口はよく動くが、行動力がないな。ささつと働け。クズが。」

「あ、今のカチンと来ちゃったなー。お前を殺すか？」

「やってみろ、この単細胞狼。三秒後には、貴様はこの世の塵となつているだろう。」

「殺す……！！……！！……！！」

「ハイハイ！止めてくれよ。今から、仕事だよ。怪我したら、駄目だよ。それに、今回は僕がやると思うから、手を出さないでね。」

「ハイハイ。分かったよ。千。」

「千晴さん。どうして、私たちを連れて来たんですか？あなたがやるなら、私達とプラス汚物はいらぬような気がしますが？」

「てめー、誰が汚物だ！！（怒）コラ！！（怒）」

「他に誰がいるんだ。」

「やっぱ殺す！！！！！！」

「五月蠅い！！（怒）あんた達、私はね、仕事を早く終わらして『ごく ン』見たいんだから！！早く終わらせるよ！！！！！！」

「ハハハ。ミドリらしいや。え〜つと、さっきの質問の話になるんだけど、簡単に言うとな、見張りだね。ほら、一般人には、こういうの見せたくないからね。分かったかな？」

「はい。分かりました。」

「うん。じゃあ、いくよー!」

「おうー!」(はい。)

「いや、そこは、合わせようよー!冷ー!」?

不安であるが、四人組はこうして工場へと向かう
だが、この時、ある1人の女に出会ったため、運命の歯車が回って
しまうなんて、誰も思わなかっただろう……

退魔士と妖怪の出会い！？いきなり、バトルかよ！！

同時刻の夜

「ちっ」

不覚。私としたことが、こんな雑魚にケガをしてしまった。

「おいおい。もう終わりか？きゃはははは！もっと血を見してくれ
！」

不味い！！と思い、今いた所から、飛んで回避した。

さっきいた所は、地面が割れていた・・・。

「俺は雑種だがな、そんなじゃそこいらの、雑魚じゃねー！」

こいつは、犬や猫ではない。

簡潔に言おう。妖怪だ。

妖怪にも、雑種は存在する。強いやつだと、上位の退魔士でないと倒せないものもいる。

「だが、てめーは、終わりだ。さっきの俺の技で手をケガしたからな。」

そう。こいつの、無数の伸びる爪がやつかいなのだ。

これのせいで、手と体全体に無数にかすり傷をくらい、剣も飛ばされてしまったのだ。

「くそ！」

「悪いが終わりだ。じゃあな！」

殺れる。

そう思い、目を閉じて諦めた。

あれ??? 痛くない? 何故だ??? 目を開けると、一人男がやつ
の爪を、喰らっていた。

「おい! 大丈夫か!!」

「うっせー! 黙ってる!! あーイテーな。ちくしょうが。」

どうやら男だ。

髪の毛が白で、赤みがかった色の肌をもった、男が言った。

「おい！その雑種！おめーが、あれか？最近の通り魔事件の犯人は？」

「だとしたら？」

「罪状。人間を無断で、なおかつ私利私欲のために、傷つけつけた罪により死刑を執行する。」

「っ！！」

その男は機械的に言った内容に驚いた。

何故なら、本来退魔士の規則があり、その中で、裁判官の位しか正式な法でしか、裁けないのに裁こうとしているのだ。

「は？」

やつは一瞬の隙がでた。そして、白髪男はやつの爪をつかみ、自分の所に引きつけた。

「へ？バカな！？」

「おせーよ。あばよ。」

そして、白髪男をやつの顔面に、フックを喰らわした。

「ぐっはー！ー！」

やつは、血を吐き出しながら飛ばされ、壁に激突した。
やつの顔は、潰れて原型が留めていなかった。

「さて、仕事終わったし帰るか。」

と、陽気で白髪男は言う。

「ま、まで！貴様、何ものだ！ー！」

「あん？人に名前を尋ねる時は、まず自分からじゃねーのか？」

いちいち、むかつく男だな、こいつは。しかも、何故に喧嘩腰なんだ？

「私の名前は神田かんだ 紫だ。むら」

「お前、女なのか？男ぼいな（笑）」

人が、気にしていることを言いやがったな！この白髪バカは！！

「まーいいや俺の名前は……。」

「おーい！せーん！大丈夫か？ってその子、誰？」

すると、後ろの方から男らしき者が、来ている。その男は、金髪で少しイケメンだった。

「こいつか？こいつは、神田 紫だつて。一応女らしいぞ。」

「何！！これは、失礼。俺の名前は金倉かねくら 瞬しゅんといます。嬢さん、今度お茶でもいがかですか？」

うざい。なんだ？この瞬という男は？
しかも、私を女として見てなかっただろ！

「馬鹿。止める。それに、こいつ多分退魔士だ。正式の。位は・・・多分あの剣と年からして、エリートで、裁判官補佐第一級らへんかな？」

・・・凄い・・・。

確かに、私は裁判官補佐第一級である。もともと、家柄がそういうものだったため、この仕事を始めたのである。

裁判官補佐第一級は、基本的に、妖怪を弱らせてから捕まえる役職だ。

そして、剣の事だが、これは、退魔士の中では、一般的に売られている『士騾馬』という白い刃である。

これは、鉄と比べかなり、固い。しかも、軽いため、お値段が0が7個ぐらいつくほど高い。

「げ、マジで!?!」

「そつだ。確かに、私は補佐一（裁判官補佐第一級の略）だ。」

「うつそー!!でも、禁断の恋みたいで、燃えるな。」

「アホか!何が禁断だ。つか、妖怪と恋するはずねーだろ。」

!!!!!!

妖怪だと!!!!!!

「貴様ら妖怪なのか！」

「??あゝ。まゝ元は、人間だがな。」

「うるさい!!」

あわてて『土騾馬』を手にし、後ろに下がった。

「おいおい。いきなりかよ。はゝ、たるいな。」

「黙れ!!」

そして、私は白髪男に向かって刺そうとした。

が、かわされお腹に一発入った

「くっ……」

そして、私の意識は、無くなった・・・。

ある時は人間、ある時はバンパイア。その名は、千！！つか、これパクリじゃね

「……ん。」

「こじは？」

「……は！」

妖怪に、ボディーブローされて、気絶したのか！！

「一応言つとくが、私はそこそこ強いはずなのだが、最近、やられすぎているのは何故なのだ？」

「んしょ。」

起き上がって、部屋の様子を見るとかなり片付いている。

「というか、部屋に置いてある物が、あまりない。」

「テーブルとタンスと冷蔵庫だけって、少なすぎだろ！？しかも、冷蔵庫は、よくホテルとか置いていようなちっちゃいものだし……。」

「あ、気がついたんだね。」

ドアの方から、突然声がしたので、向いて見ると黒髪の少年がいた。
なんか、何処にでもいそうな、中学生に見えた。

「自己紹介は、まだしてないよね？僕は赤谷^{あかたに} 千晴^{ちはる}。あ、一応、男だからね。あだ名は千^{せん}だよ。千^{せん}って読んでね。」

そして、微笑む。
ちよっとその微笑み方は可愛かった。

「神田 紫だ。」

「あー、知ってるよ。」

「???なんで、知っているんだ？初めてだよな？」

「あー、千夜に聞いたからね。会いたい？」

「いや別にいい。」

「いやいや！そこは聞こうよ！？話進まないじゃん！？タイトル通りにはいかないよ！？」

「???タイトルってなんだ??」

「あー、そっか。やってしまった。あー、こっちの話。気にしないで。」

変な奴だなこいつ。

「さてと、それじゃあ会わすね。」

結局会うのか……。

千は、そう言い、胸元から真ん中あたりに赤い水晶が入った、十字架の首飾りを出した。

何故それが必要なのだ？

「あー。千夜とか言うやつに会わすんだよな？何故それが必要なのだ？」

「見れば分かるよ。」

といいながら微笑む。

いちいち微笑むんだな……。

そして、千は首飾りの十字架を勢いよく外した。その、瞬間、私は寒気を感じた！！

千の体に異変が起きたのだ！！！！

髪の毛が白くなり、肌が赤みがかかり、目が赤くなったのだ！！！！！！

「っ！！お前はっ！！」

「よ。また会ったな（笑）。人間、千晴改めバンパイア赤谷あかたに千夜せやだ。」

奴だった……。

あの失礼で、腹にポディーブロー喰らわした妖怪だった……。

説明ばっかで、つまんないかもしれないけど、読んでくれたら、嬉しいな」と用
「妖怪！！貴様、よくもやってくれたな！！！」

「動くな。千晴が、せっかく治療したんだ。動くとも傷が開くから、
あまり動くなだと。」

ふと体見ると、確かに丁寧に治療されていた。
かたじけないと思うが、妖怪に保護される筋合いは無い。

「それに、俺は妖怪だが、千晴は妖怪ではない。そこを、わきまえ
てくれ。」

???

意味分からない？

「何でだ？普通、貴様がバンパイアなら、千というやつも妖怪だろ
？例え、親がどちらか人間でも、半分は妖怪になるだろ？」

「確かに。父親がバンパイア、母親が人間だから、半妖になるんだ
が、元々は、俺、バンパイアの体と意志が、出始めたのが、千晴が
幼稚園の時頃だ。」

人間の体から、バンパイアの体に、なりかけたんだ。

いきなり、多重人格になり、精神が幼い子供には、精神が壊れるに決まっている。

それを防ぐため、退魔士に頼んで、この『ホーリー・クロス 聖封・十字架』で、人間の人格と体を保ちつつ、バンパイアの人格と体にさせたんだ。

つまり、『ホーリー・クロス』をつけていれば、人間の体で、精神が千晴。外せば、バンパイアの体で、精神が俺ってわけだ。」

・・・長いな。

よく、分からない方は、

「つまり、・・・。」の部分で、聞いとけばいいのかな？

「ん？だが、それだと外したら、ずっとバンパイアのはずだぞ。なぜ人間に戻る？」

「それは、『ホーリー・クロス』の特徴で、妖怪を弱らせる力がある。だから、妖怪としての素を弱めるから、人間としての素が、強くなり自然と人間に戻る訳だ。」

こじけ感が、ありありの設定だな！！！！

「ま、そういう訳で、今はバンパイアだ。あ！言とかねーと、お前、俺を殺したら、逆に死刑になんぞ。」

「は？何故だ？退魔士の仕事は、妖怪を殺るのが、仕事だろ。」

やつは一瞬だが、眉間にしわ寄せていた。しかし、奴は、また何喰われない顔に戻り言った。

「確かに、俺は妖怪だ。だが、同時に裁判官でもある。」

「何！！馬鹿な！！！！妖怪が、退魔士！！！！しかも位が、上位の！！ありえん！！！！！！」

「別に、信じて欲しい訳じゃない。ただ、事実だ。もし、殺ったら、規則に反するぞ。反逆者としてな。それに、例えそれ覚悟で、殺っても勝てねーが。」

最後は聞き捨てならないな！

確かに、裁判官以上の者は、下級退魔士に、（あくまで、）制裁を下す事が可能だ。

しかし、下級退魔士は、やり返す事は出来ない。

悲しいが、退魔士の世界は、そういう世界である。

だから、皆、裁判官になろうと努力しているのも事実だ。

私も、その内の一人である。

「っつと言っ訳だ。まゝ仕方ね〜な。相手が、裁判官じゃあ〜な。ハッハッハ〜（笑）。」

うぎー!!

こいつ、丁湾に沈めたいな!!!

「あ、そうだ。今日はここで休め。俺は友達の家で休む。だから、安心して寝ろ。」

「な!!!馬鹿な事、言つな!!!明日、私は学校だぞ!!!」

「へ〜。学校ね〜。つまり、学校名は私立しりつせいとがくえん聖斗学園だろ?」

確かに、そうである。

こちら辺の中で有名な学園である。

何せ、在校生が千人近くいる為、遊園地一つ作れる位の広さを持った所である。だが、何故含み(笑)?
しかも、こいつ性格悪いだろ。

「確かに、そうだが。それが何か?」

「俺も、そこなんだ。だから、一緒に登校しようや。」

「寝言は寝てから言え。しかも、肝心な制服が無い。」

「制服なら、調達できるから平気だ。だから今日はここで寝る。」

「は！？どう、調達すんだ！！！」

「俺、一応生徒会です。だから、平日の朝6時30分に起きとけよ。」

は？！！？こいつが生徒会だと！！！！学校が、腐る！！！！

「おおおい！！ちょっと待て！！」

「んじゃ、また明日」

といい出てしまった……。

「人の話聞け！！くそ！！……でも、今、結構遅いな。もう12時か。」

そう、時計を見たら、もう12時であったのだ。

「ま、私も眠いし、帰るのめんどづだから、寝よう。」

そう言い、私は夢の中に旅立った……。

タイトルだけでも笑いをとりたい。そんな朝のお話。第5話目です!!

「……ん。」

朝か。時刻は6時25分か。あと、五分でやつが来るのか。

「あれ？もう、起きたの？」

いや、もう来た!?

五分前行動か!?

律儀だな!!!

「いや。つい、さっき起きたばかりだ。千晴君だよな？」

「うん。そうだよ。後、あんまし千晴って名前好きじゃないから、千って呼んでくれない？」

「なぜだ？あの、白髪妖怪との区別しやすいじゃないか。」「いや。僕の体は一つだから、千として統一したいんだ。だから、千って呼んで。」

納得できそうで、できない。

だが、このままだと話が、進まないから無理やり納得してくれ。

「分かった。千と呼べばいいんだな。」

「うん！じゃあ、ちょっと待ってて。今から、ご飯作るから。」

そう、言い台所に行った。

~~~~~

「よし！完成！！」

そう言い、ご飯、味噌汁、目玉焼き、鰯の開き、牛乳というメニューだった。いかにも、朝食といったものが四食あった。

四食？

何故、四食なんだ？

「何故、四食作ったんだ？」

「ん？見れば分かるよ。そろそろかな？」

「せ〜ん。お腹減ったよ〜。」

と言い、入って来たのは、あのうざい男、瞬だった。

「うお！！昨日のお嬢さんじゃないすか！！まっまさか！一緒に、  
ごっごっ飯と一緒に食べるんすか？」

「まっま〜そうだが。」

「よっしや〜！」

「しんせい。」

「おや〜！〜！」

いきなり、眼鏡をかけた背がでかい男は、うざいやつに頭を殴った。  
うざいやつは、湯気が、出ている、丸いたん瘤たんこぶが、できた。  
現実で、湯気が出た、丸いたん瘤たんこぶって、できるんだ……。

「冷〜、起きたんだ。」

「どっかの汚物せいで、目が覚めました。」

「誰が汚物じゃー!!！」

「凄い回復力だな!？」

「もう、たん瘤が治ってるよ!!!？」

「やりますか？結果は、見え見えですが？」

「おう！殺ってやるっじゃねーか!!！」

「はいはい。今日は、お客さんが、いるんだからケンカは止めてね。」

「ぐっ。千が、言うなら仕方ねー。」

「千さんが、言うなら仕方ありませんね。汚物、命拾いしましたね。」

「……千強くないか？」

「そう言えば、あなたとは、初対面でしたね。私の名前は青島あおしま冷れい一いちと言います。」

つと言い、自己紹介した、背高眼鏡さん事、冷一が言った。

「神田 紫だ。よろしく。」

「此方こそ。」

「よし！冷一の自己紹介終わった事だし、ご飯にしよう！」

「そうだな！！今日はいつもより、豪華だし」

「しゅっ瞬！！そう言う事は言わないで！」

「確かに、何時もよりあじの開きの一品がおおいですね。」

「冷一も、言わないで……！」

ぷん。

通りで多いいわけだ。  
だが、何故一品増やしたのか不明だ。

「紫さん。大方、あなたが来たから、千さんは、自分が作った料理を、あなたに食べて貰いたかったんでしょ。」

「っておい！！今、私の心読んだろ！？」

「気のせいです。」

「……………恐いな。  
こいつ…………。」

「とつとり合えず、食べよう！ね？」

「そうだな！！いただきます！！！！」

「いただきます。」

と言い、ウザイ男と冷一はご飯を食べ始めた。  
何故、千そこまでテンパるんだ？

「いただきます。」

私も、合掌してから食べ始めようとした。

「あ！紫、ご飯なるべく早く食べてくれない？」

??何故だ??

「早く学校に行つて、制服に着替えて貰いたいから。」

なる程。

確かに、今の情態は不味い。

言つてなかったが、今の服装は、上下ジャージだからな。

「分かった。努力する」

「うん！んじゃ、僕も。いただきます。」

ちなみに、ご飯はおいしかった。

~~~~~

「それじゃあ、行こうか。」

と言い、制服着た千と私は玄関に向かう。

ちなみに、男子の制服は、紺色のブレザーで、ズボンが灰色で、ネクタイが緑色したものだ。

女子は、上とネクタイが同じで、下がスカートである。

「千さん。平気なんですか？」

と言い冷一が心配そうに言いながら来た。

何が心配なんだ??

「多分平気だよ。それに学校から五分で、行けるから。」

「そう言っつて、毎回やっかない事になっているじゃないですか。」

呆れたような、口調で言っている。

そんな大変なのか？

だが、私がいるから平気だ。

「平気だ。例え、運悪くても私がいる。」

「ハハハ。有りがたいけど、男の面子が潰れるんだけど……。」

そんな事どうでもいい。

「ほら、行くぞ。」

「分かったよ。んじゃ行ってくる。瞬と戸締まりよろしく。」

「はい。分かりました。」

と言い、私と千は玄関から出た。

千と2人っきりの登校は、地獄を見るから気をつける!!

「うん。いい天気だ!」

綺麗な青空。

暖かい日差し。

気持ちいい風。

まさに、春を感じるものばかりである。

ちなみに、今は4月。

春である。

「千。今日はいいい天気だな。」

つと言い、振り返って千の方を見る。

「おい、金くれよ。兄ちゃん。」

「すみません。今、お金持っていないですよ。」

……1人のチンピラらしき者にかままれてた……。
朝から、からまれるって凄いで、千……。
……は。

朝から疲れるな。

仕方ない……。

「悪いが、その人は私の連れでね。急いでいるんだ。帰ってくれないか。素直に帰ってくれたら、危害はくわえない。」

「なんだお前？」

頭が爆発した男は言う。

「てめーも、やられたいのか？」

「冗談は貴様の頭だけにしてくれ爆発頭。」

「きつ貴様!!」

そついい、男は、大きく振りかぶった、右パンチを打ちこもうとした。だが、甘い。

「振りかぶった拳は隙が出やすいぞ。」

と言い、そのパンチを、右手で受け流し、やつの首もとに、自分の左の拳を当て、

「もう一度言う。素直に帰ったら、何もしない。」

と言い、今度は殺気を出しながら言った。

「くつくそが！！覚えていろ！！！！」

どっかの悪役が、言うセリフを言ってからチンピラは消えた。

「紫、ごめんね。」

「礼には及ばん。」

「は。何で、毎日絡まれんのかな。」

はい？

毎日なのか？

「昨日は、不良に五回ぐらい絡まれて、犬に追い掛けられて、酔っ

払いに三回絡まれて。もう、やだ（泣）。」

「……悲惨だ。」

普通に、こんな事が、毎日合ったらキリがない……。……。

ん？今、私は千と2人きりだ。

という事は、千が合ったら、自分も合うのか！？

それは嫌だ！！？

無関係の人間を巻き込まないでくれ！！

「あ、学校が、見えて来た。後10分も、掛からないよ。」

確かに、千が見ている方向に、我が学校、私立聖斗学園がある。

聖斗学園は、丘の上にあり、坂道があるのだが、これがかなり長い。

距離約900メートル。

通称『始まりの坂』である。

名前の由来が、『この坂を、上ったら学校の始まり』と言う意味が込められているのだが、始まる前に、疲れと思うのだが……。

「よし、それなら、早く行こう！」

「うん！」

千の厄災が、降りかかる前に、早く学校に行かなければ……。

~~~~~

「……疲れた。」

「……ごめん。」

あれから、20分掛かって、やっと『始まりの坂』に着いた。何故、10分長いかと言うと、千の厄災が、降りかかったのだ。まず、

チンピラ×5に、絡まれる。

不良×3に、絡まれる。

別のチンピラ×2に、絡まれる。

カラスの大量の群れに、遭遇。

酔っ払い×2に、絡まれる。

不良×3に、絡まれる。

犬×2に、追い掛けられる。

と言ったものだ。

正直、この20分間で、これだけの出来事があると、嫌になつてくる。

というか、この20分間に、これだけの出来事が起こったのか……。

「やはり、手こずってましたか。」

「お！千と、紫ちゃんじゃん！大丈夫か？」

後ろから声がしたので、振り返って見ると、冷一と瞬がいた。

「あれ？2人とも早くない？」

「千さん、それは違います。私達は、いつも通り、出ただけです。」

「そう！俺ら、千達が出てから、10分後に家を出たんだ。で、今に至るってとこかな」

「つまり、冷一達と一緒に登校しても同じだったってこと？」

千、そんな事聞いたってあんまり変わんなかったと思うぞ。

逆に変わったら凄いぞ。それに冷一、そんな事知ってる訳ないだろ。

「そうですね。あまり変わらないと思いますよ。誤差がでるとすれば、五分ぐらいですかね。千さんと一緒に登校は、大勢いた方が、時間短かくなるという事は、実証済みですから。」

知ってたよ！

しかも変わったよ！  
だったら朝に、言ってくれ！！  
こっちは、大変だったんだぞ！！

「あ、そう言えばそうだったね。」

「せ〜ん〜？ど〜ゆ〜う意味かな〜？」私は、あ・く・ま・で優しく、笑いながら聞いてみた。

「ん？ひっ！？あっあのむっ紫さん？あっあの、おっ怒ってない？」

「な〜に言ってるんだ〜。せ〜ん？私は、その事を、ただ聞きたいだけだよ。君は、冷一が調べた事を知ってたのかい？」

「あっあっあの〜、目が笑ってないんですけど……。」

「何を言ってるんだい？干？君は、知ってたのかい？」

「えっえ、あっあの、その、え〜っとですね……。」

「知ってたのかい？」

「……………はい。」

「ほう。知ってて、あえて、私を道ずれにしたのか？」

「……………忘れてました。……………すみません。」

ぶち!!

その時、私の何かが切れた音がした。

「すみませんで、済むかあああああ!!!!!!!!!!」

そう言い、千を蹴り飛ばした。

「ぐっへえ!?!」

千は、『始まりの坂』の半分くらいまで飛んだ。私は、心の中で、千とは2人つきりで、登校しない事を誓った……………。



やっと出てきた悪魔の生徒会長！！つか、最近タイトルで笑いをとれてない。

「は〜。朝から疲れる事ばかり起こるな。」

ここは聖斗学園の二階の2棟の2年A組だ。

この学園は1〜3棟まであり、1棟は1年生だけの教室、2棟は2年生だけといった感じで、仕切られている。

ちなみに、2年はA組〜L組まである。

他の学年は何組あるのか知らない。

「まさか、あの人がいるなんて……。」

そう。

これより前に、千達と合流し、生徒会に行ったのだが、そこである人物と会い、トラブルを起こしてしまい、逃げてきたのだ。

「何故こんな事になったのだ……。」

過去を少し遡って見る……。

~~~~~

「ふ。やっと、着いたね。」

「千さんが、ちゃんと話を聞けばよかっただけの事ですよ。」

「いや、その、え」と、……はい。すみません。」

今、私達がいる所は、生徒会だけしか入れない、三階建ての建物。通称『生徒会堂』である。名前が、普通だと思っただ方。

それは、作者に言ってくれ。

やつは、

「いい名前がなくて、こうなったから、仕方がないじゃん」

といた開き直ったメモを、私によこしやがるから、文句一つぐらい言っただけでくれ。

閑話休題。

その建物の中の三階の部屋の前にいるの。

「は。これからあの人に会つのが憂鬱だ。」

「確かに。多分、千さんは、あの人に、一発腹に蹴られるでしょう。」

「あの人って？」

「あれ？紫知らない？ここの生徒会ちよ……。」

つと千がその先の言葉を言おうとした瞬間、私達の前の部屋のドアが突然勢いよく開けられ。

「遅い！！このバカ千！！」

とその人物は、正確に千の腹に飛び蹴りを喰らわした。

「がふっ」

と言い千は飛んだ

綺麗に弧を描き

千は飛んだ

20メートル

千は飛んだ

まるでダメ人間が進化した瞬間のように

千は……

「紫さん。詩を作っている暇はありません。しかも、駄作です。」

冷—！！

また勝手に人の心読んだな！！

駄作でわるかったな！！！！

「あら！紫じゃない？」

と言った千を蹴った人物。

「緑？」

「そつだよ！紫、おはよう！」

この人物は、私と同じクラスの人、栗原

くろはみどり
緑である。

「なんで、緑が此処にいるのだ？」

「ここ会長室だよ。私は生徒会長なんだから、会長室にいるのも当然でしょ。」

緑が、指差す所に金色の表札に『会長室』と書かれていた。

「なるほど。」

「おい！！せつ千がー！めっ目を開かないぞ！？」

といい振り返ると、存在があまりにも、薄くて気づかなかった瞬と千がいた。

今の千は屍のようだ。

「は〜。あんだけで気絶なんて情けない。バンパイアのくせして、弱いよな〜。特に、千晴の方は〜。」

「え！！緑は知ってるのか！？」

「ん？何の事？」

「千が、妖怪だということだ！」

「あ、それ？知ってるも何も、千とは幼なじみだから、千が二重人

格になった頃の事も、知っているよ。」

初耳だった。まさか、千と幼なじみだったとは……。

「さて、これ起こさないで。瞬！千の顔上げて……！」

「……？」

「そうそう。す……、千……！！起きろ……！！……！！」

と怒鳴りながらビンタをした。

あ……緑？

それじゃ……千が死んじゃうよ？

「いつて……！！あ！緑！？ねえ……！！いつか、このままだと僕死んじゃうから暴力止めて……！」

いや！？生き返ったよ……！！

「大丈夫だよ。妖怪だから死にやしない……多分。」

「妖怪とかだからとかじゃない！！つか、多分って何！？暴力行為止められないの！？」

「んゝ無理」

「おい！？考えてないでしょ！！」

なんだか千と緑の漫才が始まっている。

「あ、紫ちゃん。今の内に服替えなよ。場所は会長室のダンスの中に入ってるから。」

確かに。

今の内に着替えよう。

「俺も一緒に行って上げ……。ぎゃー！！」

と、冷一が瞬に拳骨を喰らわした。「何ほざいている。このエロ犬。紫さん早く着替えて下さい。」

「ありがとう。」

「おい！このメガネ小僧！！誰が犬だと！！」

「全く、嫌みにもならないバカだ。脳みそがない発情工口犬が。」

「殺す！！！！」

こちららも漫才をやっている入るので私はさっさと部屋に入った。

~~~~~

「ここが会長室か。」

いかにも、社長が使ってそうな羽毛の絨毯に、ソファー、さらには木製のデスクもある。デスクの上にはパソコンもある。ふと、部屋を見回すと確かにタンスがあり、その中を見ると、真新しい制服と、上履き、ネクタイ等一式全部揃ってた。

「凄いな。でも何で、全部揃ってた？」



という疑問を抱きながら着替えてた。

~~~~~

コンコン

突然ドアの方から音がした。

「緑だけど、入っていいかな？」

「うん。いいぞ。」

と言い、緑達が入ってきた。

「すまない。制服貸して貰って。」

「別にいいよ こっちも商売だし」

は???

今なんて？

「まっまさか。緑！！もしかして、紫にも払わすの？」

「当たり前じゃない」

「干！！払わすとはどういう事だ！！」

私は怒鳴った。

「多分制服のレンタル料だよ。紫は緑と同じクラスメートだから、お金払わないと思ってただけど……。」

「それじゃあ、他の生徒に悪いじゃない。ま、割引位ならいいかな。ブレザー、ワイシャツ、ネクタイ、スカート、以上あわせて、800円になります」

高！！

レンタル料が、一つの値段が、だいたい2000円は高いだろ！？しかも、生徒に金を払わす生徒会長なんて見たことないぞ！！

「悪いが。今お金持って無いんだが……。」

「そんな言い訳知りません。さっさと払ってください。」

恐！！

このままでは不味い！！

私も、千みたいに飛びたくはない！！

「くっそ！！」

「あ！逃げるな！紫！！」

~~~~~

で、現在に至る。

「ふ〜。ここまで逃げれば平気かな。」

と席に、着いっつとしたその瞬間。

「紫。また会えたね。」

と言い、後ろから緑が現れた。

そうだ。。。。。

緑は、私と同じクラスだった。。。。。というよりも、足速くないか!?

「放課後、会長室に来てね。来なきゃ退学だからね。」

。。。。もう嫌。

やっと出てきた悪魔の生徒会長！！つか、最近タイトルで笑いをとれてない。

すみません。編集して更新遅くなっています。明日には多分できると  
思います。

読者が心に感じた事が、今回のタイトルです。第8話目！！（前書き）

すいません。更新遅くなり、しかもタイトルが思いつかなくて、こんなタイトルにしました。

読者が心に感じた事が、今回のタイトルです。第8話目！！

「は〜。」

「何ため息ついちゃって？幸せが逃げちゃうぞ」

「かわいく星つけても意味ありません。それにもう幸せは逃げてます。」

今は放課後で、私と緑は会長室に向かっている。

「全く。あなたがいけないんじゃない。」

「お金払うなんて知らないぞ！！」

「そんなの知りません。」

この人はさっきからこれだ！！

「別に払いたく無ければ、退学にしてもいいんだけど……。」

「断固お断りします。」

お金を払わ無いから退学なんて酷くないか！？  
極悪非道！！金の亡者！！それでも、生徒の見本か！！

「何か、言っただかな？紫？」

「いいいえ……。」

緑はカンが鋭いな……。

「まー、それは置いといて、部屋に入りましょうか。」

いつの間にか、会長室に着いていた。

何故、会長室に向かっているのかは、前回の話を読めば分かるので、省略して貰おう。

コンコン

緑は、会長室のドアをノックしてから、入った。

私も続いて、中に入って見ると、千と冷一と瞬がいた。



「あ、来たね。」

「うん。じゃあ早速、紫が、お金を払わないから、どつやって落とす前つけるか言わないと。」

どうする気だ。

しかも、落として前つてヤクザじゃあるまいし……。

緑は急に、真剣な顔になってから、

「まず、紫は生徒会執行部に入ってもらいます。」

は？今何て？

私が生徒会に入る？

何で！！

緑は、パソコンの方へ向かい、パソコンの画面を私に向けて、

「紫の事を調べただけど、

神田 紫 年齢16歳。

5歳の頃に、退魔士の修業をし、10歳で、裁判官補佐第3級を合格し、11歳で裁判官補佐第2級、12歳で今の裁判官補佐第1級の資格をとり、現在にいたる。14歳と15歳で、裁判官試験を2回受けたが、どちらとも不合格になっている。主に剣を主要とした、戦闘スタイル。

剣は、土驪馬を使っている。勝手に調べちゃってごめんなさいね。間違いある？」

プライベートの権利をことごとく無視しているな。いつ調べたんだ？

間違いは見当たらないな。

「うん。間違いは無い。」

「紫凄いね！！普通、裁判官補佐の合格者平均年齢ってだいたい19歳なんだよ！！」

そうなんだ。

私は、初めて千の言った事を知ったぞ。ま、補佐3（裁判官補佐第3級の略）を取るには、妖怪を1体倒すというものだから、結構厳しかったという記憶はあるな。

「紫は、これからもこの仕事を職業として、続けるんでしょ？」

「うん。そうだ。私は、この仕事をずっと続けるつもりだ。」

「なら、絶対に生徒会に入った方がいいよ？」

何故、それとこれが結びつくんだ？  
全く関連性が無いぞ。

「どうして入るんだ？」

「考えてみなよ、主に退魔士の仕事は夜中。私達は、世間一般から見れば、高校生だよ。もし、先生や警察に捕まったら学校は停学か退学だよ。でも、生徒会に入れば、  
「生徒達が夜中出ていないかを調べるために、パトロールをしてました。」  
と、誤魔化せるんだよ。」

なるほど。

確かに一理ある。

今まで、警察達には遭遇していないが、もし万が一、遭遇してしまつたら、言い訳がきかない。元々この仕事は、裏でやるものだからな。だが、

「確かに、緑の事は一理あるが、千は妖怪だ。私は、妖怪と一緒に行動はしたくない。」

「は。別にいいじゃない、そんな事。」

「私にとっては、よくない！！妖怪と一緒に妖怪を倒す？馬鹿げてる！！」

「紫。落ち着いて考えてみなさい。裁判官が3人いる事は頼もしいはずよ。」

はい？

今裁判官が3人と聞こえたが？？

「あれ？知らなかったの？千の他に、冷一と瞬も裁判官よ。」

裁判官が3人！！

普通は、裁判官は1人で行動するものだが、それを3人で行動するなんて考えられない！

「つか、俺らの事全く知らないんじゃない？」

「確かに。私達が、妖怪であるという事も知らないでしょう。」

「！！貴様らも、妖怪か！！」

士驃馬を、自分の懐から取り出して、

「私は妖怪と群れる気はない!!」

「うお!?!紫ちゃんマジで!?!」

「頭に血が昇って、規則を忘れてるようですね。」

「うるさい!!規則がなんだ!!妖怪を殺す事が、退魔士の仕事だ!!」

「紫。落ち着いて。」

「落ち着いていられるか!!」

「確かに紫の言うとおり、退魔士は妖怪を殺す事ができる。僕が言うのも変だけど、妖怪だって話せば分かる奴もいるし、逆に人間と共存しようとしているやつだっている。そういう妖怪も殺していいのかな?」

「うるさい!!そんなの綺麗事だ!!」

私は土騾馬を千に突き刺そうとしたが、千はよけて、私が土騾馬を握っている手に手套を入れて、私から剣を引き離した。

私は一瞬だけ、土騾馬を握る手の力が抜けたから取られたのだろう。

「紫。冷静に考えて。僕らは妖怪だけど、人に危害を加えるような奴らにみえた？」

「うるさい!!」

私は、会長室から勢いよく飛び出た。

「紫!!」

後ろから声がするが私は無視した。

そう。私は、気づき始めている。

いや、気づいてしまったんだ。

千達は、人間を傷つける妖怪では無い事に。

そして、私は今までやってきたことが、間違いだという事を認める事を恐れているんだ。。。。。。。

月夜の握手。友達(?)の証(前書き)

すみません！これ全部書いてたら3日ぐらい使ってしまった！  
飽きずに見てください。

## 月夜の握手。友達(?)の証

「行っちゃった……。は。怒らす気なんてなかったのに。」

そう。紫に分かって貰おうとしただけなのに……。どうしてこうなっちゃたのかな……。

「千、そう落ち込むなよ。紫ちゃん、落ち着いたら、分かってくれるって。」

「瞬……。」

「そうです、千さん。気になさらないで下さい。多分、紫さんは理解しているはずです。」

「そうかな……。」

「人間は、そういうものです。それを認めたくないから、あんな事をしたのでしょう。後は、時間が解決してくれるでしょう。」

もし、冷一の言つとおりなら……。



「よし！なら、紫迎えに行こう！！」

僕は微笑みながら言った。

「はい？何で？」

「だって、冷一が言ってた事が本当なら、迎えに行つてあげないと。」

「千待て！理由が分からん！」

「なんで？」

「今は1人にした方が得策です。」

確かに、冷一の言ってる事は正しいと思う。  
でも、

「今、紫は悩んでるだよね？」

なら、今は友達として接して欲しいんだって言いたいんだ。

軽い気持ちで、接するだけでもいい。  
仲間としてみてもほしいから……。  
だから迎えに行く！」

僕は、妖怪だから、群れるのが嫌なのかもしれない。  
でも、僕達は仲間になりたい。

妖怪とか考えずに接して欲しいんだ。  
その事を伝えたい。いや、伝えなきゃいけないんだ。

「は。意味分からん……。でも、あんたはいつつもそう考えたら、そのまま突っ込むから、止められないね。うん。よし！！紫捜しますか！！」

「緑……。」

「千が、そう考えたなら俺は付き合っぜ」

「瞬……。」

「私もつきあいますよ。」

「冷……。みんなありがとう！んじゃ紫をまず見つけなきゃ」

「あ！そうそう、今日入った情報なんだけど、最近暴れてる妖怪グループの数が、かなり増えたらしいから気をつけなさいね。」

「ふーん。そんな増えたの？」

「えー。」

そう言い、緑はパソコンを操作して、

「妖怪の種類は、雑種。そのリーダーが雑種を見つけては、戦闘を起こして、下っ端を従わせようとしているから数がざっと100超えているね。」

「は？どっかの軍隊か！？」 凄いな。

というか、妖怪がそんなに集まるのか？  
数が多くければ、いってわけでもないのに。

「ま、そのリーダーがこの町周辺にいるから気をつけなさいって注意しただけよ。」

「うん。分かった！じゃあ、みんなで紫捜そう！！」

「「「おう!!(はい)「「「

僕は、紫の剣を手に取り、会長室を後にした……。

~~~~~

「やはりここにいた」

突然声がしたので、振り返ってみると、緑がいた。
あれから、私は学校から走って5分づく、夕日ヶ丘公園ゆづひがおかこうえんの展望台
にいた。

「紫は、夕日が好きだもんね だから、ここから見る、夕日好きな
んでしょ?」

「……そつだ……。」

私は、夕日を見るのが好きだ。

夕日を見ていると、嫌な事を忘れさせてくれる。
だから、ここの展望台は綺麗に沈んでいく所が、見れるので好きな

のだ。

「千はね、紫と友達になりたいんだって。」

「そつなのか？なら言ってくれ、私は妖怪とは群れたくない。」

「また、そんな事言って……。彼らはね、本当は妖怪じゃなかつたのよ。」

「？どついう意味だ？？」

「千は特別なんだけど、冷一と瞬は、普通に生活してれば、人間だつたのよ。」

「なんだと!!！」

「彼らは、妖怪になりたくてなつた訳じゃない。彼らは、どちらかと言つと被害者なんだよ。」

どついう意味なんだ？
被害者とは、何だ……。

「ねー、紫。もし、紫が妖怪だったら、退魔士の友達を作る？」

「そんなの作る訳ないだろー!!」

「普通はそうだよ。でも、千は違う。千は、退魔士だろうが、妖怪だろうが、人間だろうが、そんな事を考えずに、ただ紫と友達になりたいだけなんだよ。」

「ん・そ・・・と・・・。」

「え？」

「何で、そんな事する!!余計なお世話だ!!私は、退魔士だ!!
奴らを妖怪としてしか、見えない!!」

「紫・・・。」

「私は、今まで妖怪を敵としか見てない!!今まで、奴らを殺してきた!!それが当たり前だと思いつけていた!!それが、急に友達になれた!!友達になったら、私の今までやってきたことを、否定すること意味するんだぞ!!」

「それでいいんじゃない？」

「なっ！！」

「だって、もう認めてるんじゃない？あいつらは人間に危害を加えない妖怪だって事を。」

「なんでそうなる！！」

「だって今、友達になる事を、前提に考えてたじゃない。後は、気持ちでしょ？それは、乗り越えられるよ。」

「……………」

何も言えなかった。

もう、自分は奴らと友達として過ごそうと無意識に考えていたから……………」

だが、やはり気持ちは簡単に切り変える事はできない……………」

「あと、もう一歩ね。あとは、千の説得次第だね。さく、もう帰るっか？」

いつの間にか、夕日が沈んでいた。
緑は、後ろを向いて帰ろうとした。

「兄貴！あの娘、可愛くないすか？」

「おう確かに。なー、ねーちゃん？今からお茶しない？もちろん俺の奢りでいいからさ。」

男3人組が、緑に声を掛けてきた。

あれ？3人組の中に、どっかで、見かけたような事がある爆発頭がいる……。

「あ！てめー今朝のガキじゃねーか！」

「今朝？はて？」

「今日の朝！カツアゲして所、お前邪魔しただろ！！」

うん。

あ！思い出した。

あれだ！千と登校してた時に、最初から来てきたチンピラだ！
そうそう。どっかで、見た頭だと思ったら、あの爆発頭じゃないか！

「あゝ、そう言えばいたな。爆発頭。」

「てめー!」

「まで!!健。」

「兄貴……。」

兄貴と呼ばれる奴が私達に近づき……
いや、私に近づいて来た。

「おい、兄ちゃん。よくも、俺の同胞をコケにしてくれたな。」

「あいつが、先に手出したんだ。当然の報いだろ?ちなみに、私は女だ。見て分からないのか。眼科行ってこい。」

何故だ!

何故、みんなは私の事を女に見えないんだ?

「かっかっか。面白いじゃねーか。死ねよ。」

そう言い、兄貴と呼ばれる奴は、両手が変形して、刃物状のような手になり、私に切りかかった。

「なっ！」

私は、間一髪避けた。

被害は、髪が数本切れたただけだ。

「貴様妖怪だな！！」

「ん？それが？」

「補佐1の威厳にかけて、貴様を殺す！！」

「へへ。威勢がいいな嬢ちゃん。」

奴はそう言い、後ろを振り返って、奴の仲間の方を向き。

「俺の同胞を全員呼べ。この夕陽ヶ丘に。今日は楽しめそうだ。」

何が楽しみだ。

貴様らに、恐怖をこれから与えてやるんだから……。私は、土驃馬を取りだあ……。。

あれ？

しっしっ土驃馬が、

「なあああああい！！？」

何故だ！？

いつも懐に入れていたのに……。

あー！！

そうだ！！千に切りかかったが、失敗して取られてしまったんだ！！

「何が無いんだ？嬢ちゃん？」

くっ不味い！！

私一人なら平気だが、今は緑がいる……。

「あれ〜？さっきの威勢はどうした？まーいいや〜。死ねよ」

「くっ！」

奴の手は、リーチが長い刃物状になっているため、今回の刃物なら、1本が限度だ。

2本は避けられない。

つまり、不味い!!

避けられない!

「なぐにやっつてんだあ!くおら!」

ふいに声が聞こえた。

あれ?

何であいつらの背後にいるんだ?

さっきいた所から移動されてる?

ん?

誰かが私を抱きかかえてる。

謎の人物の顔を見ると、頭が、金色の毛で顔が犬の男だ。

犬?なんで犬が私を助けたんだ?

「遅い!!今まで何やってたの!」

緑が怒鳴っているのをみると、緑の知り合いらしい。

「仕方ないじゃん。この状態になれんの夜だけだし。あ!紫ちゃん大丈夫?」

「え？私はお前の事知らないが……。」

「あ。そっか俺妖怪モード見せてなかったっけ。俺、瞬だよ。ちなみに、種族は『狼男』だよ。よろしく！」

なっ！瞬だったのか！！

しかも、狼男って妖怪の中で、最速の妖怪じゃないか！

「おい。てめーら紫ちゃんと緑に、何しやがるんだ。」

瞬はそう言い、奴らにガンつけていた。

「は？おめえが何してんだ？てめーらやっちゃまいな！！」

あの妖怪は、爆発頭と男Aが瞬に攻撃しようとした。

「おせーよ。」

瞬は一瞬消えた。

そして男の背後にいた。

「狼男の中でも、最も速い男。『金色の風』「こんじきのかぜ」にやられた事を誇りに持ちな。」

「ぎいひひひああああ!!」

男達は、全身から血が出て倒れた。

「貴様!!よくも俺の同胞を!!」

あの妖怪は、小刻みに震えていた。

「だが、てめえら終わりだ。なぜなら、俺の仲間に手だしたって事は、死を意味するんだよ。」

「は?何言ってたこいつ?」

ヴォンヴォン

突然後ろから、かなりの数のバイクが、聞こえた。

「兄貴、なんすか呼んだのって?」

男Bが妖怪のリーダーにきいた。

「目的は変わっちゃったが、まーいい。この犬公どもをやれ。」

「「「うおおおおおおお!!!」「」」

もの凄い大きい声。

それもそのはず、ざっと見積もって敵の数は、70以上。かなりの数だ……。

「数は、120だ……。何分後に死んでるかな？」

「へへ。上等じゃねえか……。いくぞ!!!」

瞬は余裕の様子で立ち向かおうとしたが、ドサドサ

突然、敵の10人位が、倒れた。

「なっなんだ？」

「やれやれ。馬鹿犬。誰の許可で、勝手に手出しているのだ。」

「冷一!!」

敵が倒れた付近に冷一がいた。

「貴様!!」

男Cの手が、大きくなり冷一に殴りかかるうとした。

「やれやれ。」

冷一は、そつと手を出し、男の拳を止めた。

「なっ!!」

男Cは、びくりと動かない。

「私は、『フランケンシュタイン』というものに属する者です。バ
ンパイアと比べると力は弱いですが、他の妖怪よりは強いですよ。」

そう言い、冷一は男Cを背負い投げをした。

「なっ！」

男は宙を舞い地面に叩きつけられる。

「がっはー！！」

男Cは気絶していた。

「てってめー！！」

妖怪のリーダー達は、冷一に攻撃しようとしたが、

「お前らあ！何やってんだあ！！」

突然の声。

最後の一人。然の声。

最後の一人。「やっと来たね千 さっきの情報の奴らだよ。早くやつちやって」

緑は千に声をかけた。

「うん。お前らあ！！俺の友達に手出して！！許さねえ！！」

千は、ホーリー・クロスを外し、バンパイア千夜になった。

「あ！兄貴こいつらヤバいです！！」

「何だ！」

「最近、妖怪が妖怪を殺し、異名をもつ奴らです！」

「は？」

何だ、それは？

「金色の風、蒼きあおきせんりつ旋律、そして、生きたいきたせまぢ赤血です！！」

「へ〜。知ってたんだ。俺らの事。」

千が私の方に向かい、

「ほれ。忘れもん。」

土驪馬を渡した。

「あ!！」

「俺らと一緒に闘わねえか？流石に多いんで。」

「お前そういう奴だったか？人に頼むような。」

「ふ。お前じゃないと頼めないもんだから。」

私は、すっかりこいつらに毒されているな。

「いいだろう。速攻で終わらせよう!！」

「「「「「しゃああ!！」「「「

そう言い、私達は敵を倒しに行った……。

~~~~~

奴らを倒すのに、5分も掛からなかった。

「俺らとこんな風に群れねえか？」

不意に千は私に話かけてきた。

「一緒に笑って、泣いて、ケンカしたりして過ごしたいんだ。別に無理とは言わねーが、もし、いいなら群れねえか？」

私は、決めた。

もう迷わない。

自分の道は、世間から見れば、間違いかもしれないが、私は、こいつらと一緒に過ごしても間違いないと胸はって言える。

「あくまで、見張りだ。人間に手を出さないかを見なければ。」

「群れてもいいと受け取っていいんだな。」

「好きにしろ。」

私達は月をバックに、握手を交わした。

友達に「これのどこが、コメディ？」と言われたが挫けず、作ったコメディです  
すみません。更新遅くなりました。ちなみに本当のタイトルは本文  
中のものです。

友達に「これのどこが、コメディ？」と言われたが挫けず、作ったコメディですあの握手から1週間たった日の事。  
生徒会の執行部に入った私は、執行部しゅぎんぶつ室にいる。  
生徒会執行部のメンバーは、私と千と冷一と瞬だ。

コンコン

緑が、執行部室に入り、私達に言った一言が、今回の事件を引き起こす。

「1週間後テストだから、瞬の成績しゅせきあげるための、勉強会やりなさい。」

「瞬の短期成績上昇計画！！」

「きつきつ来てしまった。テストの時期が……。あーやだ。」

そう、テスト期間である。瞬が、頭抱えて唸っている。  
そんなになるのか……。

「もう、そんな時期なんだ。紫、全教科80点以上とれる？」

千、そんな高いのとれる訳無いじゃないか。  
無論、私は馬鹿の部類ではない。殆どの成績が、平均点以上だ。  
決して良くもないし、悪くない成績だ。  
だが、そんな高い点数は今のところ無理だ。

「悪いが、いつも通りに行ったら多分無理だ。」

「そっか……。不味いな……。」

ん？何が不味いんだ？

「生徒会のメンバーは全員、全教科80点以上取らないといけません。」

何！そんなのか！

「ちなみに、80点以上とれなかったら……。」

どうなんだ！？

冷ー！！その、先はどうなんだ！？



「緑の……拷問……。3日連続で……。俺は……あの拷問を受けて……。地獄というものは……。ああいうものだと分かった。」

恐!!

何故に3日連続!!

なるほど、瞬は一回つけたことが、あるから唸っているのか……。

「俺、毎回これをうけてるから分かるんだけど、緑の拷問道具がどんどん増えているんだよね……。」

毎回かよ!?

瞬学習能力無いのか!!

「俺……死にたくない!!だから、千!!いつも通り勉強会開こう!!ね!!」

瞬……。

そんなに恐いんだ……。

「分かった!じゃあ、僕んの家でやるか!」

こうして、勉強会が開かれた……。

~~~~~

「さてと、まずは、数学やろうか。」

講師は千と冷一と緑だ。

この三人は頭がいいらしい。

「まず、これ $5 + (-7)$ は？」

千ちよつと待て!!

この問題、中学生レベルだぞ!!
流石に、これを間違えないぞ!!
ちなみに答えは -2 だ

「えっえつと2？」

おいしい!!

ここで、このボケはいらない!!

というか、高2でこのレベル!?

「まず。瞬はここからだね。緑よろしく。」

「え!! みつみつ緑がみるの?」

ん?なんか嫌がってる?何でだ。

「はぐい。間違えると肉と爪の間に針をぶっ刺します」

地味に怖い罰ゲームだ!!

「さて、瞬はテスト前に指使える本数はいくらでしょうつか・・・。
試してガ テン」

「怖いから!俺、一本確実にうたれんの決定!?!つか、これ実験!
?」

おお!! N Kのネタがきたな・・・。
え?詰まらない?
そついう事言わない!!

「じゃあ、とりあえず瞬は緑に任して、冷一。紫みてくれる？」

「そうですね。紫さん、よろしくお願いします。」

「うむ。此方こそ。」

~~~~~

あれから何日かして、テスト2日前。

「よし！とりあえず模擬テストやりますか。範囲は勿論今回のテストの範囲だよ。」

千はそう言い、私にテストを渡した。

「千……。俺もう書けない……。。」

瞬はここ何日か、悲鳴をあげてたな。

瞬の指をみると、真っ赤な血に染まり、腫れていた……。。

緑、これ以上罰ゲームをやったら、テスト受ける前に、瞬の指が、使えなくなるよ……。

「瞬大丈夫だよ！！頑張れ！」

千は瞬の言った事をさらりと受け流し、テストを渡した。  
千、酷くないか？

「国語、英語、数学、理科、社会、の5教科。時間は50分です。  
今回私が、ここが出るのではと、思うものを抜粋しました。」

冷一はそう言い、時計を取り出して、

「それでは、始め！！」

と言い、テストが始まった。

~~~~~

「採点が終わりました。」模擬テストが終わり、冷一と千と緑が採点して、今終わったらしい。

ちなみに、自信はまあまだ。

「それでは先ず、紫さんの結果です。」

私					
英語	95点				
国語	98点				
数学	87点				
理科	89点				
社会	92点				

うむ。これは順調だな。

あとは、間違えた所を復習すれば平気だろう。

「あくまで、模擬なので、油断はしてはいけません。心配するほどの点数では無いので、平気でしょう。・・・問題は、馬鹿犬の結果です。」

瞬					
国語	35点				
英語	19点				
数学	24点				
理科	32点				
社会	38点				

こっこれは……

「瞬……このままだと緑の拷問決定だね……」

「いいいいいやああああだあああああ!!!!」

猛烈に叫んでる。

だが、これは受けても仕方ない点数だ。

というか、あんなに悲鳴をあげながら勉強したのに、これしか、上がらないとはどんだけだ!?

「瞬。今日は、寝させないよ。今からでも間に合わせる。学校に行くわよ。」

「それも嫌だあああああああ!!!!」

瞬は、緑に首根っこをつかまれ、引きずられながら悲鳴をあげながら、千の家を出た……。

「成績は上がるけど、生きて帰って来れるか不安だね……」

千の言う通りだ。

「さて、今日は解散にしよう!」

千はそう言ったので解散した。

~~~~~

テスト前日

「せ……ん……やった……ぜ……。」

瞬は体が、ぼろぼろになって、模擬テストを再度受けた。

|    | 瞬   | 1回目 | 2回目 |
|----|-----|-----|-----|
| 国語 | 35点 | 85点 |     |
| 英語 | 19点 | 82点 |     |
| 数学 | 24点 | 83点 |     |
| 理科 | 32点 | 84点 |     |
| 社会 | 38点 | 88点 |     |



凄！！

あんな短期間でこんな高くなるなんて!?

一体瞬は、緑にどんな勉強（拷問）されたんだ!!

「まー正直言うと、模擬だから、あくまで目安すんだけど、よく頑張ったね。」

千は、瞬を誉めてた。

「よし！あと1日。最後の追い上げだ！みんな！！頑張ろう！！！」

「」「」「おう……！（はい）」「」

~~~~~

「いよいよね。」

テスト返却日である。

私は全教科全部80点以上だった。

「瞬、大丈夫かな？」

「大丈夫 あんだけ勉強したんだから、80点以上いかなきゃおかしいよ」

そう言い、緑は執行部室に入った。
すると、瞬がもの凄く落ち込んでいた。

「なっ！！まさか瞬！！あなた80点以上行かなかったの！！」

緑はもの凄い恐い顔になりながら怒鳴った。

「いや。全教科80点以上は一応とってんだけど……」

ん？千の言つとおりなら、落ち込まなくても、いいよつな気がするが……。

「ただ、全て、テストの名前欄に何も書いて無くて、0点。」

なっ!!!

悲しいな!!そのオチ!?

というか、コメディーなのに、このオチは、シヨボイくないか!?

「みっみっどり?おっおっ俺!!」

「問答無用。3日連続拷問決定ね。この恥曝し。」

「iiiiiiiiいやああああああだああああああ!!!!」

「!」

こうして、学校で不思議な悲鳴が3日間、聞こえたのは言うまでもない……。

退魔士と三色体の妖怪VS妖怪とのバトル 前編！！（前書き）

すみません更新遅れました。それではちょっと短いですが、お楽しみください。

退魔士と三色体の妖怪VS妖怪とのバトル 前編！！

雨が止み、月が出てない、じめじめした夜中。

ある少女は、ブツブツ文句を言いながら、歩道を歩いていた。

「あゝ疲れた。早く帰りたいのに、電車遅れたなんて、ついでないなあ。」

この日は、落雷があったため、電車が遅れ、少女はいつもより遅い帰宅であった。

「それに、最近この近くで、通り魔なんて出てるし……。あーもう！！この道、不気味だから、余計怖いよ！！！」

そう言い、少女はさつきよりも早く歩いた。

あなたは通り魔にあったという状況を、真面目に想像したことがありますか？

大抵の人は、そんな事起こらない、という安易な考えで、済ましているはずです。

この少女も同じ考えでした。

「まだ、家まで10分も掛かるよ。あゝもう！！あ！！あの公園横切ろう！そうすれば、早く帰れるし。」

少女の考えてる公園は確かに横切れば、5分で家に帰れます。少女はいつもは、この道を使ってはいません。何故か？

それは、この公園は夜になると不気味に見えるからです。だが、この時少女の選択は、間違いだというのを知る由もない。

「う。やっぱり不気味だなあ。なんか出てこないよね？」

ガサッ

「!?!」

突然の音がしたので、少女は後ろをみる。しかし、何も無い。

「……気のせいだよね？」

少女はそう思い、また歩き始めた。

ガサガサ

「ひっ!?!だっ誰!?!誰かそこにいるの!?!?」

もう一度後ろをみるのだが、誰もいない。

「もっもう嫌だ！！もうこの公園、絶対に通らない！！」

そう言い、前を向いて歩こうとしたが、

「こんばんは」

突然、目の前に謎の物体がいた。

「キイヤアアアアアアアアアアア！！！！」

しばらくしてから悲鳴は無くなり、朝になりその公園から死者が見つかった。

その死者は女の子で、少女は腑はらと血たをぶちまけられ、死んでいたという事らしい……。。

~~~~~

「これで死者が3人目ね……。」

緑は、ここは会長室のソファアームに座りながら新聞を読んでいた。今、私と千、冷一、瞬は、緑に呼ばれて会長室にいる。

緑の話はここ最近起こっている通り魔殺人事件のことだな。

事件の内容は一週間前が最初の犯行で、その2日後に二回目、そして昨日で三回目の犯行が、起こっている。

犯行現場は、全部異なっているが、唯一共通なのは、若い女性で、全員の内蔵がぶちまけられている事である。

「多分この犯人は……妖怪ね……。」

やはりそうか……。

妖怪の犯行は、若い人間を殺し、殺し方が残酷であるのが特徴である。

例えば、今回のように、内蔵をぶちまけられるとか、体をバラバラにしたりとかして、人間の肉や、血を食べたり飲んだりする。

「例え、人間でも妖怪でもこんな事する奴は許せない。」

千が珍しく怒っている……。

「何で、そんな事するんだ。僕らは生きているんだから、みんな、



生きる権利がある。なのに、それを3人も、奪うなんて……。絶対に、この犯人をみつけてやる!!」

千はそう言い、緑のデスクを叩いた。

私は、千の考えと同じ考えである。妖怪だろうと人間だろうと、命を粗末にはいけない。

「という訳で、いつも通りパトロールするんだけど、今日から3組に分けようと思うのよ。」

何故？3組？

「ちょっと待ってくれ緑。何故3組なんだ？緑含めても5人だ。1人で、行動する人がいるのか？」

「うん。そうよ。」

私の質問に、さらりと緑は答えた。

何故!!

2人だったら、敵に遭遇しても平気だが。

「1人の方に瞬、千と私で1組。冷一と紫で、1組で行動しようと思うの。」

「どうしてその組み合わせなんだ？」

私の問いに緑は微笑んで、

「まず、瞬は狼男の状態になって、この町全体を走りながら見てほしいの。」

そして、犯人を見つけたら、私に連絡しながら、犯人を確保。

そして、私は瞬がいる場所を紫達に教える。

そして、合流して犯人を潰す。

次に、私と千のメンバーが犯人を見つけたら、紫達に私達のいる場所を教える。

最後に、紫が犯人を見つけたら、瞬と同じ事をしてくれればいいよ。

「

と言った。

この作戦は犯人を確保を主体としたものだな。

「それじゃあ、一度解散して、準備しといてね 6時に学校の始まりの坂のところに集合!!」

「了解!! (分かりました)」

各自、自分たちの家に戻り準備した・・・。

**退魔士と三色体の妖怪VS妖怪とのバトル 前編！！（後書き）**

もし、読んでたら評価してくれたら嬉しいな〜と思ってます。どんな感想、評価もいいです。どんどん募集してます。

退魔士と三色体の妖怪VS妖怪とのバトル

中編!!! (前書き)

更新遅れました!すみません!

「うむ。異常ないな。」

「そうですね。」

今、私と冷一はパトロールをしている。

あの後、学校に集合し、瞬は狼男になり、風のように消えて、千と緑と別れてから10分たつ。

「紫さん。突然ですが、何故妖怪が、いるかご存知ですか？」

そう言えば、この小説は一応、時代は現代なのに、何で妖怪いるのか、説明せずに今まで、やってきてたな。

作者！！

ちゃんと最初に説明しとけ！！

使えないぞ！！

「そのため、私が読者に説明するために、聞いてみたんです。」

冷一！！

心読むなー！！

そして、結局説明すんじゃないか！！

なら、いちいち聞くな！！

「紫さんの心情を無視して、説明しますね。」

スルーした！？

「まず、妖怪がいつの時代に現れたのか、それは、おそらく中世の時代には、もう存在していました。」

そして、そこから現代まで、妖怪は種を絶やさずに今生きています。」

「かなり昔からいたんだな。」

「そうです。では、何故現れたのかと言いつつ……。」

「と言いつつ……。」

「……不明です。」

はい？

「一拍おいて、それかい！？」

「えー。そっちの方が、盛り上がるかと。」

その演出いらんよ!!

「ですが、仮定はたてられます。」

「仮定？」

私が聞き返すと、冷一はいつも通りの口調で、

「紫さんは『パラレル・ワールド』という言葉をご存知ですか？」

はい？

なんだ、そのばら何とかは？

「『平行世界』とも言います。簡単に言うと、この世界の他に、別の世界が無限にあり、この世界と別の世界は常に平行しています。だから、『平行世界』と呼ばれているんです。」

ふうん。



だが、それとこれが何が関係しているんだ？

「では、その世界の中に、妖怪だけが存在した世界があったら？」

「！つまり、妖怪が存在する世界と、この世界に行ける事が可能なら……。」

「おそらく、この世界に妖怪が存在するでしょうね。」

なるほど。

確かに、それなら話が分かるが、一つ問題があるぞ！

「確かに納得できるが。  
何故、妖怪は人間を襲わない？

人間を、いつだって殺せるんだぞ。軍隊ぐらい引き連れれば、人間は絶滅する。」

それに妖怪がいる事は、我々退魔士だけしか知らない。」

「それこそが、我ら退魔士のおかげです。」

妖怪が現れたのだから、妖怪を倒すために集まったグループを退魔士と呼ばれています。」

我々の仕事は、妖怪を極秘で、消す事で世間に妖怪の存在を知らせないようにします。」

また、軍隊を引き連れても、平気なように少数部隊でも倒せる退魔

士が、たくさんいます。」

なるほど。

そう言えばそうだな。

退魔士の本来の仕事がそういうものだからな。

だから、世間に知れ渡ってないのか。

「それに、これはあくまで仮定です。それに、この世界と妖怪が存在する世界との行き方が難しいと考えられます。」

冷一。

何故そんな事が分かるんだ？

というか、やたら詳しくないか？

「それは、過去に軍隊並みの人数を引き連れていません。ですから、偶発的に行けた妖怪が、この世界に残っているのです。う。また、最後の詳しい理由は、自分で書物などを読んで、分析した結果です。」

また、冷一心読んだな……。

もう、冷一が心読む事が、どうでもよくなってきた……。

「さて、お喋りはここまでにして、真剣にパトロールを再開しますよ。」

「そうだな。」

こうしてパトロールを私達は再開した……。

~~~~~

「いないね。」

「そうだね。まー敵も馬鹿じゃないしね。」

「そうだね。」

どーも。

お久しぶりでーす。

こっから先は、僕。

千視点で、やってみまーす。

さて、僕は紫達と分かれた後、緑と一緒に敵を搜索しているところ
です。

「紫達から連絡きてる？」

僕の質問に、緑は首を振りながら、

「いいえ。みんな、見つけてないみたい。」

と答えた。

やっぱり、みんな同じなんだ……。
早く見つけないといけないな……。

「これ以上の被害は絶対に出させない。緑！急ごう！」

緑は微笑んで、僕の背中を叩いて、

「千は、昔からそうだよな。事件を早く解決しようとして、前ばかりしか見えなくなるから気をつけなさい。」

と言い、前に出た。

「うっ。……仕方ないじゃん。そういう性格なんだから……。」

そう。

僕はいつもそうだ。

事件ばかり見て、他の事がいっつも抜けたりしている事が多い。そして緑に怒られるといったパターンだ。

……あれ？

そう言えば、この仕事始めてから、ずっと緑と一緒に行動してるな。冷一とのペアーとか、瞬とペアー組んだ事ないかもしんないな。

「ねー緑。」

緑は振り返って、

「何？何かみつけたの？」

「いや。なんも見つけてないんだけど……。」

「ん？どうしたの千？」

緑は首を傾げた。

「いや。ただ、今まで緑としか、ペアー組んだ事ないから……。ちよっと疑問に思って……。」

「え？」

緑は、口を開けながら、驚いているみたいだ。そんなに驚かれても、困るんだけど……。

「緑が、いつも作戦作ってるけど、偶然なの？」

「えっえー。……そっそうよ。偶然よねー。」

何か、緑の答えが歯切れが悪くなってないか？

「せつ千は……。わっわっわ私の事……。」

ん？？

緑の事が、何んだ？

それに、なんか焦ってないか？

「緑の事が何？」

「私のこっこっこと。すすすす……。」

ん？

なんだ？

緑の事から、お酢の事になってないか？

それに緑の顔が、赤くなってるし。

「どうしたの緑？なんで、いきなりお酢になったの？それに、顔赤くなってるよ。風邪かな？今日は休んだら？」

「そっそうじゃない！！！」

と言い、緑はいきなり僕を殴った。

結構痛いんだけど（泣）

「だから、え〜とそのー。あーもう！！この際ハッキリ言っね！私は千の事が……。」

「キヤアアアアア！！！」

突然悲鳴が聞こえた。

声のする方を見ると、1人の男性がナイフを、若い女性に向けていた。

「緑！！いくよ！！！」

「え？・・・あ！！うん！！」

緑は、一瞬間が合ったが、すぐ元に戻った。

「おい！！お前！！何してるんだ！！」

僕は、大声で怒鳴った。

「え！ひっ！あっあっ。」

男は、慌てふためいていたが、すぐに、

「うっうるさい！！その女がいけないんだ！！女なんかもう信じねえ！！その女を殺して、俺は死ぬんだあ！！」

と言い、僕にナイフを向けて振り回した

「なっ！！」

僕は全神経を使い、ナイフを避けた。
だが、

「くっ!!」

危ない。少しかすった。

このままだと埒があかない……。

僕はナイフの刃を見切って、ボディブローをした。

「ぐっ!!」

そのまま男は、立ち崩れた。

僕は、周りを見て、女性を捜した。

女性は、緑が保護していた。

よかった。犠牲者が出なくて。

そして、僕は男の方を向いた。

「はあはあ。まったく……。なんでこんな事したんだ……。
」

男は……。泣いていた？

「女なら誰でも良かった……。あいつらは、俺を騙した……。
もう生きていけない!!!女なんか信じない!!!だから、適当に殺し
て、死にたかつたんだ!!!」

「馬鹿野郎!!」

僕は、その男を殴った。

「人の命をそんな理由で殺めるな!!お前がやってる事は、お前を騙した奴より最低だ!!この女性は、無関係なんだから!!それを、自分の欲望で傷つけるな!!」

僕は怒鳴りつけた。

今の世の中、

「殺す相手は誰でもよかった。」という理由で傷つける奴の考え方は許せない。

同じ人間なんだから、支えあって、生きていくべきなのに、なんでこんな事がおきるんだ。

「君が受けた傷の深さは分からない。

でも、そういう理由で何人も傷つけちゃ駄目だ。

今ならやり直せる。自首しよう。」

「……むっ無理だ。こんな事やったんだ。死んだ方がいい!!」

「違う!!確かに、今の君のままなら、生きてても駄目だ。

でも、君は反省しようとする心があるならやり直せる。」

「……あなたは、どうしてこんな俺を慰めますか？赤の他人でしょ？」

「違うよ。みんな人間なんだから、助け合わなきゃいけないんだ。そうだろう？」

この瞬間犯人は大粒の涙を流した。

「おっ俺間違っていました。今から、自首します。」

「そっか。もう、人を殺すなよ。」

犯人は妖怪ではなく、人間だった。
多分、この人ならやり直せるだろう。
こうして、通り魔殺人事件は幕を閉じた……。

「いや、俺殺してないんですけど……。」

はい？

「いや、今回の通り魔殺人事件の犯人は、君じゃないの?」

「いや違います。俺、人殺そうと決心したんの、今日です。」

え?

じゃあ、また振り出しデスカ?

は、疲れるな。

その時、

ピリリリリリ!!!

何か音が鳴った。

何の音だ?

「あ!私だ。え!!!嘘!!!大変よ干!!」

緑はパソコンを取り出し画面を見て、大声をだしていた。
というか、緑。

今まで、どこにパソコン持っていたの?

「どうしたの?緑?」

僕が聞いてみると、緑は、大声で答えた。

「紫と冷一が敵と接触して、冷一が倒れた!!」

「なんだって!!」

男が、僕の前に出た。
そして、

「次回に続く!!」

いや待て!!

お前が言つなよ!!!!

退魔士と三色体の妖怪VS妖怪とのバトル 後編！！

「紫と冷一が緑に連絡する少し前」

「いない。」

私達は、あの後パトロールを再開したのだが、敵は見つからない。今、電柱が無駄に多くある所にいる。

「は。今日は、活動しないかもしれませんね。」

冷一は、ため息を吐きながら答えた。

「それがいいに決まっている。」

活動しないということは、被害者はいないという事だ。それは、喜ばしい事だ。

「この辺はいないよう……。っ！！危ないです！！」

いきなり冷一は、私を押しした。
その瞬間、冷一は消えた。
いや、冷一は吹っ飛ばされたようだ。

「冷一！！！」

私は、叫びながら冷一の所に行こうとした。

「待てよ。せつかく2人きりなんだから。」

「なっ！！！」

突然の声に、私は驚いた。
周りを見たが、どこにもいない。

「どこにいる！！！」

私は土騾馬を出し、周りを見た。

「トロイな。上だよ。本当に君は退魔士なの？はあ、やりがないかもあ。」

「上？」

私は、声の内容通り上を見た。

見ると、確かにいた。

電柱の一番上の所に……。

「降りて来い！！」

私は奴に、怒鳴った。

多分こいつ妖怪だ。

何故か？

冷を一瞬で吹っ飛ばし、電柱の上に立っているからだ。

「へいへい。分かった、分かった。もうちょい楽しみなよ」

そっぴい奴は、そこから飛び降りた。

私は奴が飛び降りるまでの間に、緑にケータイのメールを送った。

「んしょつと。はじめまして。僕の名前は糸賀^{いとが}。もちろん妖怪だよ

」

敵は、言いながらお辞儀をした。

丁寧な挨拶だな。
敵なのに礼儀正しい。

「私は紫。職業は学生と退魔士だ。ちなみに位は補佐1だ。」

「なに挨拶してるんですか。紫さん。確かに感心に値いしますが、今はそれどころじゃないでしょう。」

あ、冷一が復活したようだ。

いやいや冷一。これは感心するよ。

今時の若い奴は、名前乗らないからな。後、さりげなく心読まなくていいからな。

「まー名前なんざどうでもいいんだけど。さて、蒼き旋律の青島だっけ？会いたかったよ。」

！！

冷一の事を知っている！！

「冷一。一応聞くが、知り合いか？」

「いえ。私の知り合いにあんな奴はいません。多分異名で知ったんでしょう。一応、私達有名人ですから。」

異名という事は、おそらく異名をもつ裁判官（妖怪）としてか？

「他の2人はいないか……。まーオマケが1ついるからいつか。」

なっ！！オマケって私か！！失礼な！！

「私を甘く見るなよ。」

私は、糸賀の所に走って、土騾馬で切った。

空気を……。

「ひやははは。残念ハズレ。」

糸賀は笑いながら、空中で寝そべっていた。
はあ？浮いてる！！

馬鹿な！！

「降りてこい！！」

「ひやははは 馬鹿じゃねーの。誰が降りるか。コイツ、ウケるわ」。

そんなに笑うな。

後で後悔という2文字プレゼントしてやるう。

「私を忘れてませんか？」

冷一は少し怒り気味に言いながら、電柱を次々に壊してた。

冷一！！忘れてたの認めるから、電柱壊さないで！！

一般市民に迷惑するから。

「いいえ止めません。おそらく、あの糸賀という奴の、空中で寝そべっているタネはこれだと思っからです。」

は？

何で電柱なんだ？

「ちっ！！お前、俺の正体分かったのか？」

糸賀はいつの間にか、降りていた。

今、分かってないの私だけ？

「正解率はおそらく80%ぐらいですね。いい加減言ったらどうですか？さぐり合いなんて、無駄ですから」

「へいへい。お前ら、後悔すんぜ。俺にケンカ売った事。」

糸賀はそう言い、手を顔に当てた。

その瞬間、

ゴキ！ボキボキ！グキユグキユ！！

と、不気味な音を鳴らしながら、手が四本増え、尻の部分が、大きく出っ張った形になった。

糸賀は、顔の前にあった手を、顔の前から離すと、目が8個、口から牙を出したおぞましい物体となっていた。

「くもおとこ蜘蛛男こもおとこですね？

特徴は、普通の蜘蛛は糸を出す所は、尻の部分ですが、蜘蛛男は、口と尻の2つの部分から糸を吐く事が可能。

糸の粘着力はかなり強く。それに捕まったら最後まで考えた方がいいでしょう。

また、糸の強度は鉄のチェーンと同じぐらい強くしかも糸は軽いです。

ですが、糸の色が、白色のため、避ける事が可能です。」

説明ご苦労。

とにかく、面倒な相手なんだな。

「ならば、それに当たらないまでだ！」

先手必勝

私は奴の所に走り、頭に付きを入れようとした。

「ふん！！ちつとは、考えられそうだが、これで終わりだ！」

奴は、ブリッジをしお尻の丸く出っ張った部分を出し、糸を出そうとしていた。

「ふ。馬鹿が、そんなの計算内だ。」

私は、それがでる前に、左によけた。

その瞬間糸が出た。

私は、糸賀の腹に剣を突き刺そうとした。
だが、

「へっ馬鹿だな。」

糸賀は、口から糸を吐いた。

「しまった!!」

口から糸が出て、すぐに、突き刺せば問題無いと思っていた。だが、糸賀は私に糸を吐かず、剣に糸を吐き出し、糸が剣についた瞬間、糸賀は、剣先を変更した。

そのため、剣は糸賀の腹に当たらず、地面に突き刺さった。

糸賀は直ぐに、ブリッジに使ってない、自分の腕4本で糸を掴み、剣を奪い取った。

「なっ!!」

糸賀は急いで、ブリッジから元の状態に戻して、ナイフを取り出した。

「ゲーム・オーバー」

糸賀は、ナイフを私に突き刺そうとした。

「やれやれ。私を忘れてますね。」

「なっ！！ぐふっ！！」

冷一が、糸賀に強烈な、拳を腹に入れた。
糸賀は、回転しながら、吹っ飛んでいた。

「助かった。ありがとう冷一。後は、平気だ。下がってくれ。」

私はそう言い、土驪馬を取りに行こうとした。

冷一は少しムツとした様子になり、

「何を言ってますか。協力して戦わないんですか？」「は？あんな奴私で一人で平気だ。もう油断しないからさがっていいと言ったまでだ。」

冷一何を言ってるんだ。

あー！！

もしかして、冷一の事を忘れてた事に、怒ったのか？
多分そうだな。

「悪い。冷一の事忘れてた。だから、怒ってるのだから？」

「違います。私は、そんな事言いたいのではありません。糸賀は、かなり強敵です。だから、一緒に戦えば、お互いの全力を出し切れれば、勝てるんです。」

「そんなの必要ない。油断しなければ、勝てる相手だ。」

「では、先刻油断したのは何故ですか？敵を甘く見てたからですよ？そんな方が、ちょっと気持ちを、変えたら勝てるんですか？」

さつきから冷一は、何かとつかかってくるな。流石の私でも、ムツとくるぞ。

「確かに、冷一の言ってる事はそうだ。だが、どんなピンチでも、今まで1人で戦ってきた。だから、協力なんてしなくても勝てる。」

そうだ。今まで、1人だった。こんな所が、修羅場の筈がない。

「確かにそうですね……。でも、今は1人じゃないですか。だから協力を……。危ない!!！」

そう言い、冷一は私を押し、糸に当たってしまった。

「れっ冷一!!！」

冷一は、その糸を振り解こうとするが、糸の量は増えていくため、
どんどん絡まっていった。

「俺の事忘れんな。カス共が。」

糸賀は、糸を吐き続けて、冷一の動きを封じるつもりだ。

「そんな事はさせない！」

私は、土騾馬をとりに行こうとした。

「させるかよ。」

「な!!!しまった!!!」

糸賀は、私の腕に糸を絡ませて、その糸を持ち、私を引き寄せた。

「くっ!あっ!!!」

糸賀の腕は6本ある。

力は圧倒的に糸賀の勝ちだ。

私は、簡単に引き寄せられた。

「今度こそゲーム・オーバーだ!!」

糸賀は、私の胸にナイフを突き刺そうとした……。

「悪いがトロイよ。」

「なっ!!」

突然、何者かが、私を移動させた。
顔を見ると犬だった。

「瞬!!」

「やあ。俺が来たから、もう平気だ。」

瞬はそう言いながら、私を下ろした。
冷一はというと、繭状態になって倒れていた。
瞬はの所に行った。

「なあー死体。もうくたばったのか？こっちとしては、今死ぬと困るんだよな。さっさと起きやがれこのゾンビ。」

そう言い、繭（冷一）をおもいつき蹴った。

「ふん。さっきから、言いたい放題言っつて、しかも蹴っていますね。後で、トイレに流してやろう。ちなみに、私はフランケンシュタインです。ゾンビと一緒にしないでくれませんか。ま、汚物には理解できないでしょうね。」

冷一は、そう言いながら、繭を突き破って起き上がった。

「はっ！！そんな口叩けるなら、さっさと終わらせんぞ。」

「言わなくても分かる事を、言われるとイラっときますので、止めてください。」

冷一は、私を見た。

「紫さん。戦いとはじついついものです。だから見ててください。」

と言い、直ぐに糸賀の方を向いた。

「さあ、始めましょうか。糸賀さん？今度は、2人ですよ。どうなるでしょうね。」

冷一の周りが一瞬気温が下がったのではないかと思うほど、寒気を感じた。

「やるー 2人もいるなんて。ぞくぞくするよ」

「2人じゃないよ。3人だ。」

突然の声。

振り返って見ると、寒気を感じさせる気。そして、赤みがかった肌と、白髪の男。

「よくも、俺のダチを傷つけてくれたな。生きて帰れると思うなよ！！糞妖怪！！！！」

千（千夜）は、吠えていた。

「やっと全員集合したな、三色体。さんしょくたい嬉しいよ あゝ早くお前らの血を、すすりたいよ。」

体をピクピクさせ、にやついた顔で、糸賀言っていた、三色体ってなんだ？

「なあ、千。三色体ってなんだ？」

「んあ？あー。あれ？俺らの事だ。色の名前のついた三体の妖怪っていう意味だ。ちなみに俺が、そう言い始めた。」

と、言いながら千は満面の笑みでピースしながら誇らしげに言った。
・・・悪いが、千・・・ネーミングセンスないぞ。
そして、千は、糸賀の方を向き、目を瞑った。

「・・・いくぞ!!」

千は目を開き、そう言いながら、糸賀の所に走った。

「は？こいつも馬鹿なのか？俺も舐められたものだな。」

糸賀は、口を開け糸吐き出そうとした。

「こつちを見るや。ノロマ君。」

瞬が、一瞬で糸賀の左の方に来て、殴りかかるうとしていた。

「ちっ。だが、これならどうだ!!」

糸賀は、顔を瞬の方を向き、尻の部分を前に出して、千の方に向けた。

「これで貴様のパンチを、難なく受け止められんぜ!!こつちには腕が、6本あんだからな!!」

そう言いながら、瞬の拳を止めようと構えて、糸を吐き出そうとした。

「ぎいやあああ!!こつ腕がああああ!!」

糸賀は、突然悲鳴を上げた。

何故なら、糸賀の腕2本が、地面に落ちていた。

「喰らえ!!」

糸賀は、千と瞬のダブルパンチを顔に喰らい、倒れた。

「あなたは、私達にタネ明かしをしたので、今、行った事を説明してあげましょう。」

フランケンシュタインは、死人蘇生、肉体強化等、様々な機能を持った、妖怪です。その中に特殊機能を持った、フランケンシュタインもいます。

特殊機能とは、1体1体異なった、能力の事を指します。

私もその能力を持っています。

その能力は、体の繊維を釣り糸よりも、細くした糸状のもの、指から出し、相手の体に絡ませるものです。強度はピアノ線よりも強いので、簡単に相手の腕をもぎ取る事が可能です。

これは余談ですが、私の繊維で作った糸は、青く見えるため、『蒼き旋律』と呼ぶんですよ。」

冷一は長々と自分の説明をしていた。

「てめえらしい加減にしろよ。」

糸賀は立ち上がった。

「来いよ!!!俺らが、振り返ちしてやるよ!!!」

と、千は怒鳴りながら、戦い始めた。
で、私はというと、ただ傍観しているだけなので、つまらなかつた。
3人でこんな簡単に倒せそうなんだから、自分1人でも倒せると、
思いながら見ていた。

「紫どうしたの？」

後ろを振り返ると、緑がいた。

「千が、事件起こした男を捕まえたから、警察に引き渡すのに時間
掛かっちゃって、すっかり遅くなっちゃったよ。」

と笑いながら言った。

千は、他の事件も解決してたのか？

「で、話を戻すんだけど、紫さあ、さっきムスツとした顔を、ずっ
としてたけどなんかあったの？」

と心配そうな顔で私を見ていた。

「あいつを自分1人で倒せると思ったのに、みんなで協力して倒す

のを見ていると、冷一に言われて、それで……。」

「なるほどね。」

緑は納得した様子だった。

「私は、あんなやつ1人で倒せると思ってるのに、なんで一緒に
なって戦うんだ！！緑！！私は間違っているのか！！」

私は、緑に怒鳴りながら聞いた。

緑は、微笑みながら、

「うん。間違ってる。」

と、否定した。

「なっ！！何故間違ってると言い切れる！！」

「紫、もし紫が死んだら私達はどつするの？」

もし、紫が大きな怪我したら、私達はどつするの？

そんな事起きたらみんな悲しむよ。

だって仲間なんだから。

だから、みんなでカバーしあったりして、協力するんだよ。
紫は、もうこのメンバーには欠かせない、大切な友達なんだから、
その考えはダメだよ。」

私は緑の言葉を聞いて、黙ってた。

私は、。。。。。

私は直ぐに土騾馬を取りに行った。

「むっ紫!!」

緑は私を呼んだ。

だが、私は、緑の事を無視して走った。

私は千達の事を。

私は。。。。。

「私は馬鹿だ。あいつ等の考え方は普通そうだよな。だって。。。。。」

仲間なんだから。

「あれ？雑魚が、一生懸命走ってるじゃん。」

糸賀は、私が走っている事に気づいたようだ。

「もう誰でもいい。あいつを殺してやる!！」

「させるか!！」

千達は、糸賀がナイフを投げるのを、止めようとしたが、間に合わなかった。

「紫!！」

千が何か叫んでいた。

今、私は今自分が出ることを考え出した事を、実行している。

後、5メートル。

4メートル・・・3メートル・・・2・・・1・・・。

「紫!!--危ない!!--」

あと、50センチ・・・20センチ・・・5センチ・・・後2センチ・・・後・・・後・・・後・・・。
数センチがこんなに長いなんて思わなかった。

「・・・やった!!」

私は土騾馬を確実につかみ、糸賀の方を見ると後数センチで、ナイフの刃の先端が私に当たる!

私は、土騾馬でナイフの進行方向を受け流した。

間一髪、避けれた。

私はそのまま土騾馬の刃先を糸賀に向け、おもいきり投げた。

「なっ!!」

糸賀は、一瞬驚いていたが、難なく私の剣を避けた。

「後は・・・任せたぞ。・・・みんな。」

私が呟いたのが、聞こえたのか、糸賀が避けた一瞬の隙を、千達は狙っていた。

「なっ!!しまった!!」

「あばよ。」

千は糸賀の腹に、瞬は顔、冷一は背中に一発殴った。

「がっは。」

糸賀はその場で、倒れ込んでいた。

「ハアっハアっお前！！お前のあの行動が無ければあー！！」

糸賀は私を睨んでいた。

「私はお前と言う名前ではない。私は三色体の妖怪と、共に戦う退魔士の神田 紫だ。」

私は、誇らしげに言った。

周りを見ると、千達は笑っていた。

「何が三色体だ。何が退魔士だ！！殺す！ころす！！コロス！！」

糸賀は、そう叫びながら立ち上がろうとした。

「ぎやあああ!?!」

糸賀は、燃えた。

突然の出来事に私達は、驚いてた。

「何故!!何故ですかあああ!!」

糸賀はそう叫びながら燃えた。

数分足らずで、糸賀は燃え尽きた。

「これは、おそらく、新たな敵が来ますね。」

冷一は、そう呟いた。

「あー。かなり強敵かもな……。」

千も頷きながら呟いていた。

私達は、燃え尽きた糸賀の灰を見ながら、新たな敵の予感を感じていた。

~~~~~

「あの雑魚にしては上出来かな？」

月明かりの中、遠くの方で千達を見ていた男が呟いていた。

「あいつら雑魚そうだし、簡単に倒せそうだぜ？」

別の男が、呟いてた男に近づいて来た。

「だが油断は禁物だ。」

男は、近づいてきた男を見ながら言った。

「でも、あいつら4人であれだろ？俺ら5人なら余裕だろ。」

近づいてきた男はそう答えた。

「そうだな。」

男はそう答えながら、千達の方を向いた。

「楽しませてくれよ。三色体の妖怪。フフフフフ。」

男は不適に笑いながら、去っていた。

千達の戦いはこれからだった……。



兄は威厳があるはずなのだが、私には全く威厳がないダメ兄貴。そんな方にお薦

ここは、日本ではないとある場所。

ホテルのベッドで気持ち良さそうに寝ている男がいた。

ブルブル　ブルブル

突然、ケータイが鳴ったので、おもむろに電話を取った。

ピ！

「もしもし。」

【俺だ。】

男は、一瞬で目が覚めた。

なぜなら、電話から聞こえる声は、男が最も嫌ってる人間だったからだ。

男は心の中で、舌打ちしながら、今度から相手の番号を確認してから取るうと、心の中で誓った。

「あんたか。なんだ？」

【今すぐ日本に行け。】

「は？俺、前々から言ってるよな。お前の事死ぬ程嫌いだったというの」

【これは頼み事ではない。命令だ。】

電話の男が言い方は、ものすごい量の殺気を感じるものだったが、男はそれでも、反抗した。

「はっ。お前は命令しかできない、糞野郎だったな。だが、命令だろつとあんたの言う事は聞く気はないぜ。」

【もう一度言う。これは聖十退魔『せいってんたいま』としての命令だ。】

声だけしか存在しないはずなのに、さっきよりも、倍の量の殺気を感じた。

周りに一般市民がいたら、その場で気絶していただろう。

【それに貴様は、断れない。絶対に……。】

「どづいう事だ？」

電話の相手の余裕な言い方に、ムカついたのか、男は少し不機嫌になりながら、聞き返した。

【今回は、紫の事だ。】

「は？紫？？何で紫が？まだ、裁判官の試験じゃないだろ？？」

【紫の友達関係の事な……。】

「は？……お前にあれほど言ったよな。なあ。紫のプライベートにケチつけんなって。お前のせいであいつは、傷ついてるんだよ！何回言えば分かんたあ！！」

男は、怒鳴っていた。

【……その友達が妖怪でもか？】

「！！馬鹿な！お前の事をあれほど忠実だった紫がか！？」

男は、半分驚きと半分は嬉しいと思っていた。

何故なら、紫はあれ（電話の相手）の言う事を忠実に行う、操り人形みたいなものだった。

だから、『妖怪を絶対に倒すもの』だと言われ続けた人が妖怪とつるむなんて、初めてあれに反抗したという嬉しい気持ちと、妖怪とつるむ事に反対する気持ちがあった。

「・・・まあ確かに、退魔士としての、規則を破ってるといえば、破ってるな。・・・今回だけだ。あくまで、紫とつるんでる妖怪について、しらべてやる。これは聖十退魔の仕事としてだ。決して、家族内の事ではないと、上に伝えてくれ。あと、資料を明日中に送れ。」

男は、反抗を諦めたようだった。

何故なら男は、紫とつるんでいる妖怪に、興味あるのはもちろん、紫に会えるというのだから。

紫に会うのは何年ぶりだろうか、物凄く会いたいな。

多分、また男らし・・・ゲフンゲフン。

女らしくなっているだろうな。

と男は心の中で、1人浮かれていた。

【ふん。やっぱり私の命令には逆らえんな。】

男は電話していた事を忘れていた。

だが、電話の相手の声が聞こえた瞬間、男はイラっとなり、

「なあ、あんたは俺らの事なんだと思ってんだ？一回ハッキリしようぜ。」

と言った。

電話の相手は、少し黙っていた。そして、

【お前は、扱い辛いが言うことを聞く暴れ馬なら、紫は賢く忠実な犬だな。どちらも使える駒だ。】

と答えた。

男は呆れていた。

自分の子供を、駒として見ていないのだから。

【お前もそうだ。結局最後は従うんだからな。ハハハハ。】

電話の相手は、笑っていた。

「よかったな。お前が目の前にいたら、殺してたよ。」

男はそう言い、電話を切った。  
そして、思い切り電話を投げ捨てた。

~~~~~

糸賀の戦いから、1週間程した日の事である。
あの後、私達は何事も無かったかのように毎日を過ごしていた。
そんなある日、私は今日は特に用事が無いので帰る支度を終え、廊
下を歩いていた。

「紫!!」

不意に呼ばれたので、
振り返ると、千がいた。

「千か、どうした?」

「紫。今日暇?」

「は?」

千は、いきなりそんな事を言ったので、私は驚いてしまい、返事を返すのが遅くなった。

「いや、特に無いが・・・今日はパトロールの日ではないはずだったが・・・。」

「うん。今日は無いよ。一緒に帰らない?」

千はそう言った。

別に、一緒に帰るだけなら暇と言わなくてもいいよつな気がするが?

「別にいいぞ。」

「うん。じゃあ、帰ろう!」

と千は満面の笑みで、答えた。

~~~~~

「ハア〜疲れた。」

「どーも！みんなのアイドル、緑です！！」

私は今、会長室でパソコンのファイルの整理をして、終わった所で

とても、膨大な量の情報を整理するのはとても大変な仕事でした。

コンコン

「失礼します。」

ドアをノックし、誰かが、入ってきた。

私は、入ってきた人物を見るため、ドアの方を向くと冷一だった。

「冷一か。どうしたの？」

「千さんと紫さんが一緒に帰りましたよ。」

「えー！そっそう。」



私は冷一の言葉に動揺してしまった。

私は千の事が好きだ。

まあ、小さい頃からずっと一緒だったし、恋心ぐらい抱く……かな？

とりあえず、千と一緒に帰りたかったが、紫に先を越されたのは、ちよつとショックだった。

「ちなみに、誘ったのは千さんです。このままでは、緑さん大ピンチです。」

「えー!!」

私は、驚いてしまった。千が自分から誘うなんて……。

というか冷一!! あんたが、なんでここまで知ってるの!!

しかも、私の恋心もまで知ってるし!!

「それは、千さんが心の中で、今日誘う事を考えていたので、誘って成功する所を見ました。また、最後の問いは、大分前に知っています。」

ピキ

あれれ。私の体の一部のどっかが、一瞬音がした

「冷一。地獄って本当にあるの？」

私は、冷一の所に行き、笑いながら言った。

「緑さんは笑っていると思いますが、他の人から見ると、目が笑っていません。ちなみに、地獄というのは、想像上の話なのであるとおもいません。」

偉いな。冷一。

君は私の心読んで、ちゃんと返答するなんて。

そんなに死にたかったなんて。

私は冷一の肩に手を乗せた。

「そっか。ねえ冷一。」

「はい。何でしょうか？あと、肩が物凄く痛いので止めてくれませんか？」

冷一の肩がミシミシいていた。

「そんなの気にしない。で、地獄が有るかどうかって話なんだけど。一回死んで、確かめてみて。世界の果てならぬ地獄の果てまで

「イテQ」

このあと、私がやった事はご想像におまかせします」

~~~~~

「まったく。女の子の心中読むなんて最低！！まっストレスは解消したけどね」

冷一はピクリと動かず、地べたに寝そべっていた。
あっ！！床に血が一杯付いてる！！
まあ、それは冷一に拭かせるか、

ピロロン ピロロン

あれ？メール？

何かあったのかしら？

私は、パソコンの方へ向かい、画面を見た。

「これは情報の方ね。この前の事件の、新たな敵についてかな？」

私は、情報を集めるのは得意な方だ。
まあ、私の家がちょっと特殊でもあるしね。
それは、おいおい話すとして、この前の事件が終わった後、すぐに調べたが、何も出なかった。
だから、ある人物にお願いして搜索しているが、まだ入ってなかった。

私は、メールを開いてみた。

「……え!!嘘!?!なんで!!」

メールの内容は敵の情報ではなく、

「なんでこの町に、聖十退魔が来たの!!」

私は、叫ばずにはいらなかった……。

~~~~~

「ねえ。紫の家族って何人家族?」

あれから私達は一緒に帰っていた。不意に、千は質問してきた。

「え？何でいきなりそんな事きくんだ？」

「いや、紫の事あんまり知らないじゃん。だから聞きたいな〜っと思っただ。」

千は、そう言いながら微笑んだ。

一方、私は動揺していた。

何故なら、自分の家族が一番聞いてほしくなかった。

特にあの人の話になると……………。

考えただけで、寒気がした。

「むっ紫？大丈夫？顔色悪いよ。ごめん、気を悪くさせて……………」

千は、凄く心配そうな顔で私を見て、謝った。

いかん。千に心配掛けさせてはいけない。

「いや、大丈夫だ。私の家族についてだよな。父と私と兄の3人家族で、母は私が生まれてすぐ死んだらしい。」

「えっ！！……………そっかだから……………ごめんなさい、そんな事言わせて。」

千は、今度は頭を下げて誤ってきた。

「別に気にするな。」

「でも……。」

千は、凄く反省した顔していた。私は、千に微笑みながら、

「確かに、母は亡くなったが、私には兄がいる。あの人は、いつも私の味方だ。

だから、寂しくなんかなかったし、辛くもなかった。

ここ何年間会ってないが、私は、あの人を兄として持てた事を、誇りに思ってる。」

と千に誇らしげにいった。

千は、私の話を聞いて、いつも通りの状態になり、

「いいお兄さんだね。いいな。僕は一人っ子だから、お兄さんが羨ましいよ。」と千はそう言った。

「ああ、最高の兄だよ。千の家族は3人家族なのか？」

と私は千の家族の事を聞こうとした。

「僕？僕は……。」

「紫!!！」

千は自分の家族の事を言おうとした時、突然後ろから、私を呼ぶ声が聞こえた。

振り返って見ると、黒いスーツを着て、銀色のスニーカーを持った、男の人が、こちらに向かってくる。

髪は金色、肌は透き通ったように白く、青色の目をした、少し美形の人。

その人は、私にとって大切な存在である人。

「……兄さん？」

千(千晴!?) VS シスコン(プラコン?) が微妙に入ったお兄さんとのバトル  
「兄さんなんでここに?」

私は、兄さんがいることに驚いていた。  
何故なら、兄さんの仕事は、ほとんど海外のため、日本にいることは、基本考えられないのだ。

「紫……。」

兄さんは、私を懐かしげに見ながら、私の名前をつぶやき、

「紫!! 会いたかったよ!!」

と、いきなり、私に抱きついてきた。

兄さん!! 恥ずかしいから、抱きつくのを止めてくれ!!

せっせっ千!!

口をあんぐり開けたまま、見ないでくれ!!

というか、助けてくれ!!

「長年会ってなかったが、こんなに、おと……ゲフンゲフン。女らしくなって。」



うおい!!

今、男らしいと言おうとしたらうっ!!!!

はっ!!!

いかん、この言い方だと男らしくなっている。

反省。

そして、兄さんは、抱きついたまま、目を瞑り、後ろ髪を撫でていく。

いい加減離れないと、千に変に勘違いされるな。

「兄さん!! 離れて!! ここは日本だ!!

アメリカじゃないんだから、抱きつくのは、止めてくれ!!

しかも、友達がいる前だ!」

と、私は言いながら、無理やり兄から離れた。

「全く、何恥ずかしくてんだ。

兄弟なんだから、別にいいだろう。」

と言い、兄さんは頬を膨れていた。というか、ちょっと待て!!

兄さん!! 字が違う!!

兄弟じゃないから!!

兄妹だからねえ!!!! 妹だから!!

「あの・・・紫さんのお兄様ですよ?」

と、千はおどおどした様子で、兄さんに質問してきた。

「あぁつと失礼。」

君の事は、全く気づかなかつた。

ゴホン、私は、紫の兄、神田かんだ空そらと言います。以後お見知りおきを・  
・・。」

と兄さんは、千にさらりと酷い事を言いながら、手を前に出し、頭を少し下げながら、千にお辞儀をした。

「あーはい！紫さんといつも一緒にいる・・・」

「君が、赤谷 千晴君だよな？」

兄さんは千が自己紹介をする前に、千の名前を言った。

「あの、僕ら初対面ですよな？」

何で、僕の事知ってるんですか？」

「それは、君の事を調べたからだよ。」

赤谷 千晴、年齢16歳種族はバンパイア・・・だよな？」

!!

なんで、兄さんが千の事を調べたんだ？

「・・・僕が妖怪だと言うことを、知っているんですか？」

千は、顔が険しくなりながら、兄さんを睨んでいた。

「それはね・・・。

君と同じ、仕事をしているからだよ。」

と、兄さんはスーツケースを開け、刃が三股の槍を取り出し、千を切ろうとした。

「くっ!!！」

千は、うまくよけた。

「へえ〜。少しはできるんだな。」

兄さんは感心してた様子で眺めてた。

というか、止めなければ、一般人に見つかるし千も危い!!

「兄さん!!」

槍を今すぐ戻して!!

一般人に見つかる!!

それに、千は妖怪だが、人間を襲うやつじゃない!!」

「ん?平気平気。一般人に見つかる前に指令終わらせるから。」

と、ケラケラ笑いながら答えた。

指令?なんだその指令!?

「兄さん指令って何?」

私は、兄さんをじっと睨んだ。兄さんは顔が険しくなり、私を見て、

「聖十退魔としての仕事だ。

あの糞野郎からの指令が出て、どんな奴かと調べるためだ。」

と言った。

糞野郎からの指令?

まさか……。

私は、体を震わせていた。兄さんは千の方を向いた。

「そういう訳だ、赤谷君。君がどれくらい強いのか、調べるよ。」

「聖十退魔といえば、裁判官の最強の10人しか出来ない、最高の位の存在の方。以外と聖十退魔って、暇人なんですね。」

と千は、兄さんに挑発的な事を言った。確かに兄さんは、聖十退魔士だ。

聖十退魔とは、千の言った通り、裁判官の内、最強の10人しか出来ない名誉あるもので、一人一人に聖十退魔士としての、名前を与えられる。主な仕事は、裁判官では、倒せられない妖怪を倒す人だ。そして、あの人も……。

「ふむ。強気だね。」

まあ、それはさて置き、改めまして、私の名前は、空。別名『翼』タスクともいいます。

そして、この槍の名前は『破邪の槍』といます。では、勝手に異名を語っている裁判官。

『生きた赤血』の赤谷 千晴!!  
始めましょうかあ!!」

兄さんはそう叫ぶと、千に槍を突き刺そうとした。千は、兄さんの槍をよけて、兄さんから離れた。

「あんまり戦いたくないんだけど……。」

千は、そう言いながらも戦闘態勢に入っていた。あれ？  
千夜にならないで戦うのか！？

「千、待った！！」

千夜にならないのか！？  
兄さんは、強いぞ！！」

千は私の方を向き、ニコツと笑いながら、

「大丈夫。」

と言い、兄さんの方を向き、

「どっからでもかかってこい！！」

と千は叫んだ。

「ふうん。バンパイアにならないとは……。」

悪いが、俺は本気でいくよ……。」

と言い、兄さんは千の方に走った。

「避けれもんなら、避けてみやがれ!!」

と兄さんは言いながら、槍を素早く、連続で千に突いた。

「くっ。」

千は、苦しい顔をしながらも避けていた。

「なっ!! 避けてる!?!」

兄さんは、驚いていた。

その瞬間、兄さんに隙が出てしまい、千は槍を避けたあと、その槍を掴み、無理やり槍を奪った!!

千は、そのまま兄さんの顔に、右手で殴ろうとした。  
だが、

「え? 消えた?」

そう。

千のパンチは、何も当たらなかった。  
兄さんが一瞬で、消えたのだ。

「危ない、危ない。

まさか、これを使うなんて。」

突然、兄さんの声がした。

「どこだー!!」

千は周りを見回した。

そして、私も兄さんを捜すため、周りを見回した。

「上だ。上にいる。」

「……え？」

千と私は驚いていた。

なぜなら、兄さんは飛んでいたのだ。兄さんは、四枚の金色の羽を  
背中につけていた。



「何故、タスクと呼ばれるか分かったかい？  
この、翼は『エンジェル・バード』という。  
これをつけて飛ぶと、最高速度は、風の領域までいく。」

兄さんは、そう言うてから、また消えた。

「槍を返して貰うよ。」

兄さんは、地面に降りていた。

兄さんの手には、千が奪った槍を、もっていた。

「速い！！」

千は、驚いていた。

兄さんは、刃先を千に向けて、

「ついて来れるかな？」

と言って消えた。

その瞬間、千の右肩にかすり傷がつけられた。

そして、左肩、顔、脚にどんどん、千のかすり傷が増えていく。

その、かすり傷が増えていく、ペースは速くなっていく。

「くっ！！早く逃げなきゃ！！」

と千は、避けようと走って逃がれようとしたが、全く意味がなかった。

「このままじゃ……」  
仕方ない……」

と千は突然、目を瞑った。

「何やってんだ！！」  
千！！そのままでは、やられんぞ！！」

私は叫んだが、千はそのまま状態だった。

「諦めたようだな。  
これで最後だ！！」

兄さんの声が聞こえた、その瞬間、千の周りに砂埃が起きた。

「何が起きたんだ？」

砂埃が消えかけた時、私が見たものは、千の足下に、兄さんが倒れてた。

「兄さん!！」

私は叫びながら、千達の所に行った。  
兄さんは、気絶したようだ。

「千?これは……。」

千は、急にアタフタし始めて、

「紫!!!ごっごめん!!  
ぼっ僕!!無我夢中になっちゃって……。  
本当にごめん!!!」

と、千はよく分からないが、謝った。

「……千が謝る理由が分からないが、とりあえず、どっやって兄さんに勝ったんだ?」

と言うと、千は咳払いをして、

「えーと、全身の神経を集中させて、空さんのいる所を、気配だけを頼りに、どこにいるかを感じながら、空さんが最後のとどめをきめようとした瞬間だけ避けて、そのまま体のどっかに、思いっきり殴ったら、気絶してた。」

と千は言った。

私は驚いていた。

あのスピードで、気配を感じることができるとは……。

「そっか。とりあえず、今日は帰らせてくれないか？  
兄さんの手当てをしたいから。」

と言って、私は兄さんを背負い込んだ。

「あっ！僕がやるよ。」

僕の責任だし。」

「いや。大丈夫だ。」

少し兄さんと話がしたいし。」

「でも……。」

千は、まだ何か言おうとしてた。  
千の気持ちはありがたいが、兄さんが、言っていた指令を出した人物について、聞き出したかった。

「千気持ちは嬉しいよ。  
だが、今回は諦めてくれ。兄さんと少し、話たいんだ。  
それとも、千は兄妹の水入らずの話を邪魔したいのかい？」

と言うと、千は

「うっと」唸っていた。  
ハハハ。少し言い過ぎたかな？

「ごめんごめん。でも、兄さんの手当てと、話がしたいから、今日は諦めてくれないか。」

と私は微笑みながら言うと、千は顔を赤くなり、

「・・・あつ。・・・うん。」

と頷いてくれた。

良かった。と私は心の中でホッとした。  
だが、千が顔を赤くするのは分からない。

「まあ、そういっわけだ。じゃあまた明日…！」

と千に言うてから、私は兄さんを背負いながら、自分の家に帰った。

祝PV4000人達成!!第1(2?)回 作者と絡もうの会(前書き)

更新遅くなってすみません

祝PV4000人達成！！第1（2？）回 作者と絡もつるの会

（作者）

「いえーい！4000人突破記念だぜー！」

（千晴）

「つか、これ前回やったよね？読みづらいあとかきで？」

（作）

「うん？あゝそれ？まあ気にすんな。」

（晴）

「……………」

（作）

「まあそれはさておき、今回もゲストは千晴！！君だ！！！」

（晴）

「はいはい。」

（作）

「反応薄くないー！ー！」



(晴)

「まあ、やる気ないし。別にいいかな。」(作)  
「テンションあげよう!!この話は、久しぶりにコメディ的にした  
いんだから!!」

(晴)

「へいへい」

(作)

「それでは、登場キャラの説明いきますか。」

NO.1 赤谷 千晴

(あかたに ちはる)

好きな物 米、トマトジュース 友情

嫌いな物 にんにく 人を殺す人や妖怪

この小説の主人公。

高校二年生であり、生徒会執行部。命の大切さを尊重し、友情に熱  
い、心優しい少年。1人で外に出かけると、数分で不良や、犬や、  
カラスなどに絡まれる。

料理はかなり上手く、冷一や瞬に朝、昼、夜の三食分作っている。

戦闘能力

パワー B

知力 B

スピード B

集中力 A

(晴)

「戦闘能力についているアルファベットって何？」

(作者)

「S」までの6段階評価、一番高いのがS。次にAといったものかな。普通だね。」

(晴)

「僕集中力以外はまあまあ普通って事？」

(作)

「うん。そーいう事。」(晴)

「……………」

(作)

「さて、微妙に固まってる千晴はおいといて、次いくぞ……！」

NO.2 赤谷 千夜

(あかたに せや)

好きなもの 米 トマトジュース 友情 人をからかうこと

嫌いなもの ニンニク 十字架 水 人を殺す人や妖怪 父親

主人公、千晴のもう一つの人格でもあり妖怪。  
種族はバンパイア。

普段の生活は千晴の精神で行動するが、妖怪の戦闘のみ、首にかけている『聖封・十字架』ホリ・クロスを外し、バンパイアの体、千夜になる。  
『三色体の妖怪』の『生きた赤血』という異名を名乗っている。  
ちなみに『三色体の妖怪』と名乗ったのは千夜である。  
ネーミングセンスが全くない。

戦闘能力

|      |   |
|------|---|
| パワー  | S |
| 知力   | B |
| スピード | B |
| 覇気   | A |

(晴)

「あれ？戦闘能力が微妙に違う！！何で!?!」(作)

「あ。それは千夜に直接聞こうか。」

（千夜）

「なんだ？俺を読んだか？」

（晴）

「あ、千夜！？何でここに！？」

（作）

「作者パワーさ！このために、千晴と千夜区別するようにしたのさ  
！！」

（晴）

「へえー。じゃあ何で、僕と戦闘能力違うの？」

（夜）

「知らねー。」

（作）

「せやあああー！？知らないじゃないよ！そこは、答えようよ！  
！」

（夜）

「知らないもんは知らん。んじゃあ、俺帰るな。」

(作)

「マジで帰った……。」

(晴)

「おい！！作者教えろ！！なんで、僕と千夜が違っんだ！！」

(作)

「ちよっ！！くっ首を絞めないで！！くっ苦しいから！！？ちゃんと話すから！！」

(晴)

「何で違っの？」

(作)

「つか、自分の体の事なのに……。すいません。ちゃんと話すから、殴る準備しないで。」

んじゃ説明しますね。要するに、千晴は体は人間、だけど千夜の体バンパイアだから、妖怪と人間の違いだね。」

(晴)

「じゃあ覇気って何？」

(作)  
「それ？それは、寒気を感じたり、恐怖を感じたり、いわゆるプレッシャーみたいなやつかな？」

(晴)  
「どれくらい凄いの？」

(作)  
「あいつの覇気は、一般人が気絶するぐらいの覇気を持つてるよ。」

(晴)  
「でも、今まで気絶した人いないよ。」

(作)  
「それは、あいつ自体が抑えてるからね。みんな気絶したら話が続かないしね。」

(晴)  
「ふん。」

(作)  
「んじゃ次、いくぞ」

NO.3 神田 紫

(かんだ むらさき)

好きな物 和菓子 扇子 夕日 剣 兄さん

嫌いな物 洋風のお食物 抱きつく兄さん 自分の事を女として  
みてくれない人

この小説のヒロインでもある、高校二年生。

髪は短めで、顔は整っているが、男っぽいため、男と間違われる。

本人は一番気にしている。

そのため、髪を伸ばすのと口調を変えようとしたが、どちらも失敗  
している。 戦闘能力

パワー C

知力 C

スピード B

男っぽさ A

(紫)

「うおい!!! 『男っぽさA』って何だ!!! しかも、戦闘能力と関係  
ないじゃないか!!!」

(作)

「っというわけで紫さん登場! ナイスツッコミだね。 (笑)」

(紫)  
「……作者死にたいのか、それほど死にたければ、私の実践練習に付き合え。」

(作)  
「すみません。調子乗りました。」

(晴)  
「ねえ、本当に髪型と口調を変えようとしたの？」

(紫)  
「あー、そうだが、髪は戦闘中に切られるし、女らしい喋り方にしようとしたが、どんな喋り方が、分からないかったしな。」

(晴)  
「何で？」

(紫)  
「家に女の人がないし、友達も男子が多かったからな。」

(晴)  
「なるほど。」



(作)

「さあー次は2連続でいくぞー!!」

NO・4 青島 冷一

(あおしま れいいち)

好きな物 読書 メガネ 千の作ったご飯 人間観察

嫌いな物 金倉 瞬 フランケンシュタイン

種族、フランケンシュタイン。享年12歳、造られてから五年経つ、背が192センチもある高校二年生。

性格は冷静沈着。クールな存在。

1日3冊は本を読んでいるため、いろいろ知っている。

体の繊維を使い、ピアノ線よりも強度が高い糸を作れるスキルや、人の心を読むスキルを持っている。

戦闘能力

パワー A

知力 A

スピード D

読心術 A

NO.5 金倉 瞬

(かねくらしゅん)

好きな物 肉 女 バイク 千のご飯 自分

嫌いな物 野菜 勉強 緑の拷問 女に暴力を振るう男 青島

冷一

種族、狼男。最速のスピードを出せる狼男の中で、一番速いと言われている、金髪で、イケメンの男。自分の事を、イケメンと思っている。

かなりの女好きで、一週間に5回以上はナンパしている。

ちなみに、成功する確率は80%と冷一は言っている。

戦闘能力

パワー B

知力 E

スピード S

女好き度 A

(瞬)

「俺扱い酷くない？」

(冷一)

「日頃の行いが悪いからだ。」

(瞬)

「てめえー！！いい度胸だな、くらあー！！死にやがれ！！」

(冷)

「ふっ。雑魚が。」

(晴)

「おい。ケンカしないで。」

(作)

「絡みがあまりないから次行っっていいかな？」

(晴)

「いいんじゃない？」

NO・6 栗原 緑

(くりはら みどり)

好きなもの 甘い物全般 拷問(?)

嫌いな物 裏切る人 お金

いつもは、IQ150の成績優秀の二年生の生徒会長だが、素は物  
凄いDSの人。

よく、冷一と一緒に情報収集をして、不良や先生を脅したりしてい  
る。

千とは幼なじみでもあり、千の事はなんでも知っている。

瞬を学力上げようと色々なスパルタ勉強（拷問？）をやって満足感  
を得たりしている。

戦闘能力

パワー C

知力 S

スピード C

サド度 A

（緑）

「やっとな私か……。」

（晴）

「僕の事何でも知ってるって本当？」

（緑）

「うん。癖も知ってるし、昨日ハンバーグ食べたのも知ってる。」

(晴)

「あれ？僕、昨日は一人で食べたのに？何で知ってんの？」

(緑)

「それは企業秘密だ。」

(作)

「とか言いつつ、隠しカメラ設置してた……。」

(緑)

「作者は、せつかくのおめでたい(？)所に血の雨を降らせたいなんて……。お望み通り、降らしてあげる。」

(作)

「ごめんなさい！嘘！！嘘だから！！その、チェンソーしまって！！わあ、わあ！！」

「ぎいやああああああ！！」

(晴)

「……後で、部屋確認しよう。」

~~~~~

(緑)

「作者がいないので、ここから先は、私が進めます。」

(千)

「え。この度PVが4000を超えて、作者は嬉しいと紙に書いておりました。」

(緑)

「なんか、友達に

「お前、文作るのが下手」とか、

「表現がおかしい」など言われ、どうにかしなきゃいけないと言いつち、何もやってません。

皆さんの暖かい心でカバーして欲しいです。」

(千)

「では、最近更新が遅いので、多分一週間に一回の更新にします。」

(緑)

「結局そうだったか……。というか、コメディというよりファンタジーじゃない？」

(千)

「作者はファンタジーの意味を最近知ったらしいよ。」

(緑)

「……。」

(千)

「こんな馬鹿作者の駄文を読んでくれて本当嬉しいです。では、またお会いしましょう!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3509e/>

退魔士と三色体の妖怪

2010年10月9日07時25分発行